

平成29(2017)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成二十九(一〇一七)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

大 桥 遺 踏 踏 踏 踏 踏
史 跡 取 落 主 池 田 墓 家 遺
倭 文 所 所 寺 在 地 遺 遺
青 谷 上 所 寺 在 遺 在 遺
湖 山 尾 所 第 1
短 松 原 島

二〇一八

鳥取市教育委員会

2018

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業計画に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成26年度から平成28年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。中でも「鳥取西道路」建設に伴って行われた発掘調査では多くの遺跡から膨大な量の遺物が出土し、地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

本報告書が私たちの郷土に所在する歴史遺産の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成30年3月

鳥取市教育委員会
教育長 尾室 高志

例　言

1. 本書は平成26年度から28年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
2. 平成26年度に実施した調査は大柄遺跡である。
3. 平成27年度に実施した調査は史跡鳥取藩主池田家墓所である。
4. 平成28年度に実施した調査は青谷上寺地遺跡、倭文所在遺跡、短尾遺跡、青島第1遺跡、松原所在遺跡、湖山所在遺跡、史跡鳥取藩主池田家墓所である。
5. 史跡鳥取藩主池田家墓所のトレンチ番号は平成27・28年度の調査で通し番号を使用している。
6. 青谷上寺地遺跡出土動物遺存体報告は岡山理科大学富岡直人教授、江川達也、大越司両氏、金沢大学覚張隆史教授より玉稿を賜った。明記して深謝いたします。
7. 本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
8. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
9. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　鳥取市教育委員会

事務局　鳥取市教育委員会事務局文化財課

調査担当 加川崇　山田真宏　野崎欽五　谷岡陽一　横山聖

10. 発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言並びにご協力をいただいた。明記して深謝いたします。(敬称略、順不同)

鳥取県教育委員会事務局文化財課　(公財)池田幕所保存会　(公財)鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター　江川達也　大越司　沖廣俊　覚張隆史　高田健一　辻誠一郎　富岡直人　中原計

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経緯と経過 1

第2章 調査の結果 2

　第1節 大柄遺跡 2

　第2節 史跡鳥取藩主池田家墓所 6

　第3節 倭文所在遺跡 28

　第4節 青谷上寺地遺跡 31

　第5節 湖山所在遺跡 42

　第6節 短尾遺跡 45

　第7節 松原所在遺跡 48

　第8節 青島第1遺跡 50

第3章 自然科学分析 52

　第1節 2016年度鳥取市青谷上寺地遺跡出土動物遺存体 52

　第2節 青谷上寺地遺跡出土馬の放射性炭素年代測定と食性復元 56

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図	2
第2図	大柄遺跡 調査トレンチ位置図	3
第3図	大柄遺跡第1トレンチ実測図	4
第4図	大柄遺跡第2トレンチ実測図	5
第5図	大柄遺跡第2トレンチ出土遺物実測図	5
第6図	池田家墓所 調査トレンチ位置図	7
第7図	池田家墓所 第1トレンチ実測図	8
第8図	池田家墓所 第2トレンチ実測図	9
第9図	池田家墓所 第3・4トレンチ配置図	10
第10図	池田家墓所 第3トレンチ実測図	11
第11図	池田家墓所 第4トレンチ実測図	11
第12図	池田家墓所 第5トレンチ実測図	12
第13図	池田家墓所 第6トレンチ実測図	13
第14図	池田家墓所 第7トレンチ実測図	13
第15図	池田家墓所 第8トレンチ実測図	14
第16図	池田家墓所 第9トレンチ実測図	16
第17図	池田家墓所 出土遺物実測図(1)	17
第18図	池田家墓所 出土遺物実測図(2)	18
第19図	池田家墓所 出土遺物実測図(3)	19
第20図	池田家墓所 出土遺物実測図(4)	20
第21図	池田家墓所 出土遺物実測図(5)	21
第22図	池田家墓所 出土遺物実測図(6)	22
第23図	池田家墓所 管理事務所保管 瓦実測図	23
第24図	池田家墓所 県保管瓦実測図(1)	24
第25図	池田家墓所 県保管瓦実測図(2)	25
第26図	池田家墓所 出土遺物実測図(7)	26
第27図	池田家墓所 地覆石に刻まれている文字 拙影	27
第28図	倭文所在遺跡 調査トレンチ位置図	28
第29図	倭文所在遺跡 第1トレンチ実測図	29
第30図	倭文所在遺跡 第2トレンチ実測図	30
第31図	倭文所在遺跡 出土遺物実測図	30
第32図	青谷上寺地遺跡 調査トレンチ位置図	31
第33図	青谷上寺地遺跡 第1トレンチ実測図	32
第34図	青谷上寺地遺跡 第1トレンチ遺物出土状況実測図	33
第35図	青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(1)	34
第36図	青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(2)	36
第37図	青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(3)	38
第38図	青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(4)	40
第39図	湖山所在遺跡 調査トレンチ位置図	49

第40図	湖山所在遺跡 第1トレンチ実測図	50
第41図	湖山所在遺跡 第2トレンチ実測図	50
第42図	湖山所在遺跡 第3トレンチ実測図	51
第43図	短尾遺跡 調査トレンチ位置図	52
第44図	短尾遺跡 第1トレンチ実測図	53
第45図	短尾遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	53
第46図	短尾遺跡 第2トレンチ実測図	54
第47図	松原所在遺跡 調査トレンチ位置図	55
第48図	松原所在遺跡 第1トレンチ実測図	56
第49図	青島第1遺跡 調査トレンチ位置図	57
第50図	青島第1遺跡 第1トレンチ実測図	58

図 版 目 次

図版1

- 大柄遺跡 調査地遠景(北東から)
 大柄遺跡 Tr2 遺物出土状況(東から)
 大柄遺跡 Tr2 SD-1断面(南から)
 大柄遺跡 Tr1 完掘状況(東から)
 大柄遺跡 Tr2 完掘状況(西から)
 大柄遺跡 Tr2 土層断面(東から)
 池田家墓所 遠景(南西から)
 池田家墓所 二・三代藩主墓碑近影(南から)
- 池田家墓所 第3トレンチ土層断面と地覆石(東から)
 池田家墓所 第3トレンチ土層断面と地覆石(南から)
 池田家墓所 第3トレンチ土層断面と地覆石(西から)
 池田家墓所 第3トレンチ地覆石検出状況(西から)

図版2

- 池田家墓所 第1トレンチ完掘状況(南から)
 池田家墓所 第1トレンチ土層断面(東から)
 池田家墓所 第1トレンチ土層断面(南から)
 池田家墓所 第1トレンチ瓦溜り検出状況(南から)
 池田家墓所 第1トレンチ土層断面(南から)
 池田家墓所 第2トレンチ完掘状況(南から)
 池田家墓所 第2トレンチ土層断面(東から)
 池田家墓所 第2トレンチ土層断面(南から)
- 池田家墓所 第3トレンチ併用時の加工痕が残る地覆石(北から)
 池田家墓所 第3トレンチ併用された地覆石(南から)
 池田家墓所 第4トレンチ完掘状況(西から)
 池田家墓所 第4トレンチ土層断面(南から)
 池田家墓所 第4トレンチ土層断面(西から)
 池田家墓所 第4トレンチ地覆石検出状況(西から)
 池田家墓所 第4トレンチ地覆石検出状況(東から)
 池田家墓所 第4トレンチ瓦溜検出状況(南から)

図版3

- 池田家墓所 第2トレンチ瓦溜検出状況(東から)
 池田家墓所 第2トレンチ排水溝縁石検出状況(南から)
 池田家墓所 第2トレンチ排水溝縁石検出状況(北から)
 池田家墓所 第3トレンチ完掘状況(南から)

図版4

- 池田家墓所 第4トレンチ併用時の加工痕が残る地覆石(北から)
 池田家墓所 第4トレンチ併用された地覆石(南から)
 池田家墓所 第4トレンチ完掘状況(西から)
 池田家墓所 第4トレンチ土層断面(南から)
 池田家墓所 第4トレンチ地覆石検出状況(西から)
 池田家墓所 第4トレンチ地覆石検出状況(東から)
 池田家墓所 第4トレンチ瓦溜検出状況(南から)

図版5

- 池田家墓所 第4トレンチ排水溝検出状況(南から)
 池田家墓所 第5トレンチ完掘状況(北西から)
 池田家墓所 第5トレンチ土層断面(北西から)

池田家墓所	第5 レンチ土層断面(北東から)	ら)
池田家墓所	第5 レンチ土層断面(北東から)	池田家墓所 第9 レンチ土層断面(西から)
池田家墓所	第5 レンチ排水溝検出状況(北西から)	池田家墓所 第9 レンチ排水溝東護岸(東から)
池田家墓所	第5 レンチ排水溝検出状況(北西から)	
池田家墓所	第5 レンチ凹字状の排水溝(北東から)	

図版6

池田家墓所	第5 レンチ凹字状の排水溝(北東から)	池田家墓所 第9 レンチ排水溝東護岸断面(西から)
池田家墓所	第6 レンチ完掘状況(南東から)	池田家墓所 第9 レンチ大面取柱柱根と掘方断面検出状況(東から)
池田家墓所	第6 レンチ土層断面(北東から)	池田家墓所 第9 レンチ大面取柱柱根拡大(東から)
池田家墓所	第6 レンチ(北西から)	池田家墓所 第9 レンチ大面取柱柱根拡大(北から)
池田家墓所	第6 レンチ土層断面(北西から)	池田家墓所 第9 レンチ柱根堀方平面(西から)
池田家墓所	第6 レンチ控え石積検出状況(南東から)	池田家墓所 地覆石に刻まれた文字(南から)
池田家墓所	第6 レンチ控え石積検出状況(北西から)	池田家墓所 地覆石に刻まれた文字(拡大)
池田家墓所	第7 レンチ完掘状況(南から)	

図版7

池田家墓所	第7 レンチ土層断面(東から)
池田家墓所	第7 レンチ土層断面(南西から)
池田家墓所	第7 レンチ土層断面(北から)
池田家墓所	第7 レンチ瓦溜査出状況(南から)
池田家墓所	第7 レンチ玉石検出状況(南から)
池田家墓所	第7 レンチ排水溝検出状況(東から)
池田家墓所	第7 レンチ排水溝検出状況(北から)
池田家墓所	第8 レンチ完掘状況(西から)

図版8

池田家墓所	第8 レンチ土層断面(南から)
池田家墓所	第8 レンチ土層断面(西から)
池田家墓所	第9 レンチ完掘状況(西から)
池田家墓所	第9 レンチ土層断面(南から)
池田家墓所	第9 レンチ土層断面排水溝上面(南から)
池田家墓所	第9 レンチ排水溝土層断面(南か

ら)

池田家墓所	第9 レンチ排水溝東護岸(東から)
-------	-------------------

図版9

池田家墓所	第9 レンチ排水溝東護岸断面(西から)
池田家墓所	第9 レンチ大面取柱柱根と掘方断面検出状況(東から)
池田家墓所	第9 レンチ大面取柱柱根拡大(東から)
池田家墓所	第9 レンチ大面取柱柱根拡大(北から)
池田家墓所	第9 レンチ柱根堀方平面(西から)
池田家墓所	地覆石に刻まれた文字(南から)
池田家墓所	地覆石に刻まれた文字(拡大)

図版10

倭文所在遺跡	遠景(北から)
倭文所在遺跡	第1 レンチ完掘状況(西から)
倭文所在遺跡	第1 レンチ土層断面(南から)
倭文所在遺跡	第2 レンチ完掘状況(東から)
倭文所在遺跡	第2 レンチ土層断面(南から)
青谷上寺地遺跡	調査地遠景(南から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ完掘状況(東から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ土層断面(南から)

図版11

青谷上寺地遺跡	第1 レンチ土層断面(西から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ土層断面(北から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ土層断面(東から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ木製品検出状況(西から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチアカスリ検出状況(東から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ木製品検出状況(東から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ土器溜まり検出状況(南から)
青谷上寺地遺跡	第1 レンチ木製杯検出状況

(南から)

池田家墓所 出土遺物

図版12

青谷上寺地遺跡 第1トレンチマグロ椎骨検出状況(南から)

青谷上寺地遺跡 第1トレンチ椎骨拡大(南から)

青谷上寺地遺跡 第1トレンチ石列検出状況(南から)

湖山所在遺跡 遠景(北から)

湖山所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)

湖山所在遺跡 第1トレンチ土層断面(東から)

湖山所在遺跡 第1トレンチ土層断面(南から)

湖山所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(西から)

図版13

湖山所在遺跡 第2トレンチ土層断面(北から)

湖山所在遺跡 第2トレンチ土層断面(西から)

湖山所在遺跡 第3トレンチ完掘状況(西から)

湖山所在遺跡 第3トレンチ土層断面(南から)

湖山所在遺跡 第3トレンチ土層断面(西から)

短尾遺跡 遠景(東から)

短尾遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)

短尾遺跡 第1トレンチ土層断面(南から)

図版14

短尾遺跡 第1トレンチ土層断面(西から)

短尾遺跡 第1トレンチ弥生土器検出状況(北西から)

短尾遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)

短尾遺跡 第2トレンチ土層断面(南から)

短尾遺跡 第2トレンチ土層断面(東から)

松原所在遺跡 調査地遠景(北北東から)

松原所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南西から)

松原所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南東から)

図版15

青島第1遺跡 調査地遠景(南南東より)

青島第1遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)

大柄遺跡出土遺物

池田家墓所 出土遺物

図版17

池田家墓所 出土遺物

図版18

池田家墓所 出土遺物

池田家墓所管理事務所 保管瓦

図版19

池田家墓所管理事務所 保管瓦

倭文所在遺跡 出土遺物

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版20

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版21

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版22

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版23

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版24

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版25

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版26

青谷上寺地遺跡 出土遺物

短尾遺跡 出土遺物

図版16

発掘調査報告書について

今回刊行の報告書より、合併時点まで週り「鳥取市文化財調査報告書 第〇集」と再び通し番号を付すこととした。2004年(平成16)の大合併以前、9つの旧市町村ではそれぞれ文化財調査報告書が刊行され、青谷町、気高町、鹿野町、福部村、国府町、河原町、用瀬町、佐治村では通し番号が付されていた。旧鳥取市も、その初期においては番号が付けられ、第32集までは確認できるが、以降の報告書には未記載であり、合併後もその流れのままであった。このことは整理や説明の際に混乱を生じることから、改めて記載することとした。このため、鳥取市教育委員会発行の報告書には昭和期に刊行した旧番号と、今回からの新番号との2種類が存在することになる。

合併以降の報告書対照表は下記の通りである。

発掘調査報告書対照表

集	書名	副書名	発行日
1	緑山4号墳発掘調査報告書		2004年(平成16)12月24日
2	平成16(2004)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2005年(平成17)3月15日
3	内海中寺ノ谷遺跡	県営内海中地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2005年(平成17)3月15日
4	鳥取市内遺跡発掘調査報告書	上原遺跡・山宮阿弥陀森遺跡	2005年(平成17)3月19日
5	鳥取市内遺跡発掘調査報告書	善田傳示ヶ崎遺跡等	2005年(平成17)3月
6	平成17(2005)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2006年(平成18)3月23日
7	平成18(2006)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2007年(平成19)3月23日
8	大坪イカウ松遺跡(第2番)	県営日置谷地区経営体育城基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2007年(平成19)3月
9	史跡本庵寺跡発掘調査報告書		2008年(平成20)3月26日
10	平成19(2007)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2008年(平成20)3月26日
11	大坪大純手遺跡(第2番)	県営日置谷地区経営体育城基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2009年(平成21)3月
12	平成20(2008)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2009年(平成21)3月26日
13	平成20(2008)年度史跡鳥取城跡太鼓門跡発掘調査報告書		2009年(平成21)3月
14	平成21(2009)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2010年(平成22)3月26日
15	平成22(2010)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2011年(平成23)3月24日
16	平成24(2012)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2013年(平成25)3月28日
17	史跡樹本庵寺跡環境整備報告書		2013年(平成25)3月29日
18	史跡鳥取城跡南太閤ヶ平発掘調査報告書	第21・26・27・28次発掘調査	2013年(平成25)3月29日
19	平成25(2013)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2014年(平成26)3月
20	史跡鳥取城跡太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅱ	第22・30次発掘調査	2014年(平成26)3月28日
21	平成27(2015)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2016年(平成28)3月30日
22	史跡鳥取城跡南太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ	第34次発掘調査	2016年(平成28)3月
23	平成28(2016)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2017年(平成29)3月
24	平成29(2017)年度龜井忍布麻溝古墳調査報告書		2017年(平成29)10月
25	鳥取市後文6号出土遺物の研究	出土品再整理報告書	2017年(平成30)3月23日
26	平成29(2017)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2017年(平成30)3月29日
27	史跡鳥取城跡南太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅳ	第31・39・40次発掘調査	2017年(平成30)3月29日

*集は「鳥取市文化財調査報告第〇集」の略、第25集以降には記名あり

第1章 発掘調査の経緯と経過

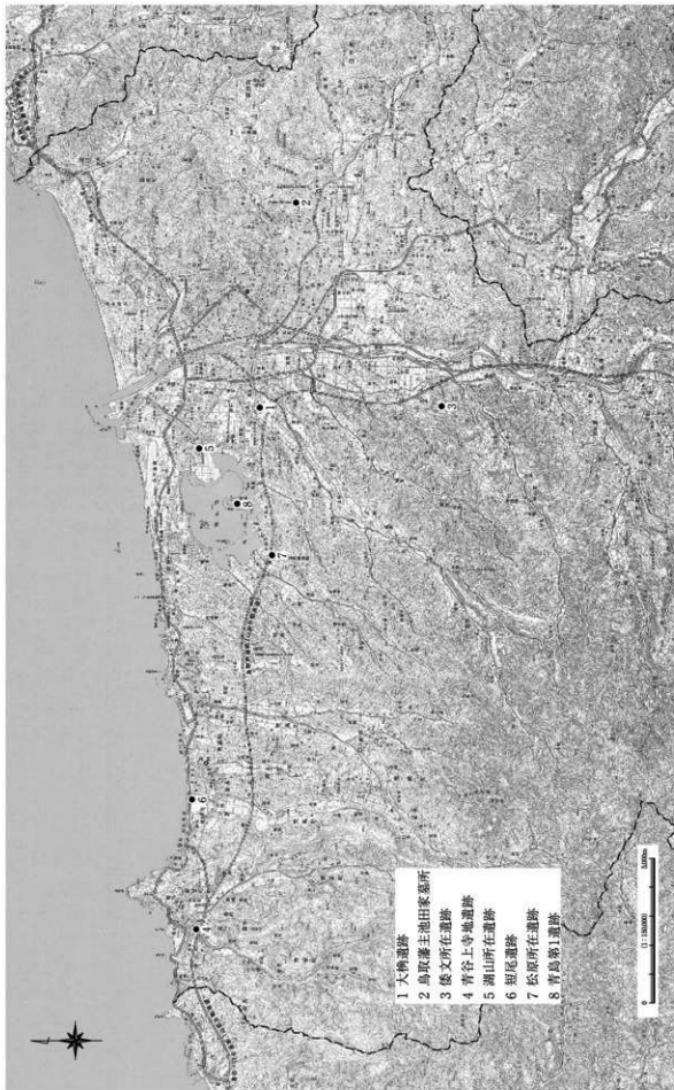
鳥取市は、2004年(平成16)11月に周辺8町村との合併により面積765.31km²、人口約20万人を擁する都市となり、2018年(平成30)4月からは中核市へ移行する予定である。平成16年の市域拡大に伴い、市内の遺跡数も青谷町、国府町等多くの遺跡を有する町村との合併によりその数を増し、古墳・集落跡・散布地等4,800か所以上になっている。このような中、現在進められている一般国道9号鳥取西道路改築事業は市内でも有数の遺跡密集地である湖山池南岸から青谷にかけて高速道路の建設が進められており、建設に伴って高住牛輪谷遺跡、良田平田遺跡、常松菅原遺跡、下坂本清合遺跡、青谷横木遺跡など新たな遺跡の発見が相次いでいる。特に青谷横木遺跡では古代山陰道や全国有数の木製祭祀具、高松塚古墳の壁画に次ぐ女子群像が描かれた板絵など特筆すべき遺物が多数出土している。

今回の報告は平成26年度から平成28年度に実施した試掘調査の結果である。平成26年度は社屋建設計画に伴って実施した大柄遺跡、平成27年度は史跡整備に伴って実施した史跡鳥取藩主池田家墓所、平成28年度は高速道路交通警察隊庁舎建設に伴って実施した松原所在遺跡、工場改築計画に伴って実施した青谷上寺地遺跡、鉄塔建設計画に伴って実施した倭文所在遺跡、ビオトープ設置計画に伴って実施した青島第1遺跡、湖山第1遺跡の範囲確認を実施した湖山所在遺跡、土砂採取計画に伴って実施した短尾遺跡の6遺跡の試掘調査結果である。なお、史跡鳥取藩主池田家墓所は平成27年度及び平成28年度の2か年にわたり実施している。

試掘調査はトレンチ掘削による遺構・遺物の包含状況の確認に主眼を置いて実施し、層ごとの遺構認定と包含遺物の把握を行なながら掘り下げを行った。トレンチの掘削は基本的に人効によって実施したが、松原所在遺跡、青谷上寺地遺跡は重機を用いて表土除去を行い、その後人効による掘り下げを行った。整理作業は基本的に調査終了後から行い、本格的な報告書作成は平成29年12月から実施した。本報告の調査面積は393.7m²である。各調査遺跡のトレンチ数、調査面積、現地調査期間は次の通りである。

遺跡名	トレンチ数	調査面積(m ²)	現地調査期間
1 大柄遺跡	2	50.0	20150218～20150226
2 史跡鳥取藩主池田家墓所	9	30.0 30.2	20150811～20151119 20160627～20160804
3 倭文所在遺跡	2	21.0	20160418～20160427
4 青谷上寺地遺跡	1	135.0	20160511～20160617
5 湖山所在遺跡	3	63.0	20160804～20160914
6 短尾遺跡	2	22.5	20160915～20161004
7 松原所在遺跡	1	21.0	20161020～20161031
8 青島第1遺跡	1	21.0	20170306～20170327

第1図 調査道路位置図



第2章 調査の結果

第1節 大柄遺跡

大柄遺跡は、鳥取平野を北流する千代川水系の支流、野坂川流域の丘陵裾部から平野部に位置する。昭和50年に行われた「団体営高草地区ほ場整備事業」の工事中に多数の土器片が出土したことからその存在が明らかとなった。その後、圃場整備事業や福祉施設建設等に伴う発掘調査が、鳥取市教育委員会によって昭和52・57年、平成9・12・23・24・25・26年の数次にわたって行われている。その結果、大柄遺跡は大溝・鶴岡集落にまたがる東西約16km、南北約0.8kmにわたって広がっていることが確認され、縄文時代晚期から中世までの各時代の遺物が出土する複合遺跡であることが明らかになった。これまでの調査で縄文時代晩期末の突堤土器や弥生時代前期の中でも古相の特徴を持つ遠賀川式土器が出土し、同調査地内から畔状構造等が検出されている。このことから、鳥取平野でも早い時期に水稻耕作が開始された地域と考えられる。また、古代の遺構・遺物も多数出土し、墨書き土器や祭祀具がみられ、官衙関連施設の存在が明らかになっている。さらに、周辺の丘陵上には弥生時代後期の里仁1から3号墓や里仁29号墳、柄間1号墳などの千代川左岸における大型前方後円墳などを初めとする墳墓群や古墳群が展開する地域となっている。長期間にわたる発掘調査によって、当時に人々の居住域や生産域の様相が明らかになっている。

今回の試掘調査は民間企業の社屋増築工事に伴い実施したもので、圃場の対象地内に2ヶ所のトレチを設定した。

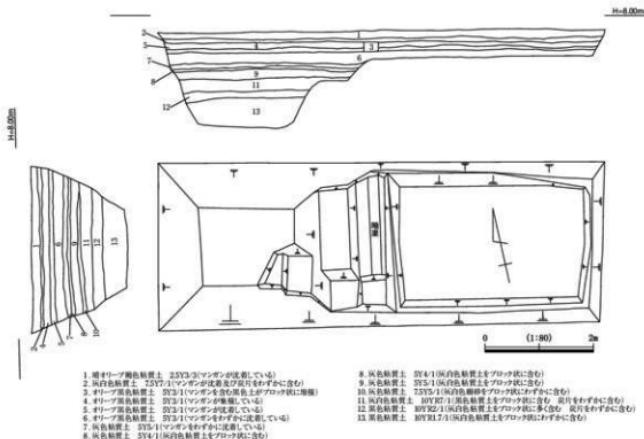


第2図 大柄遺跡 調査トレチ位置図

第1トレチ(Tr 1)[第2・3・5図 図版1]

県道21号線が東西に走る道路沿いの中国電力鳥取電力センターから東、約100m地点の圃場に2.96×8.6mの東西トレチを設定した。

標高約7.7mから下、20cm前後の第1層の灰オリーブ褐色粘質土と第2層の灰白色粘質土は耕作土で、次の第4層のオリーブ黒褐色粘質土と第5層のオリーブ黒褐色粘質土は現代の水田の底土であると想定した。第1から5層までの出土遺物は土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器類などの細片で時代は安定し

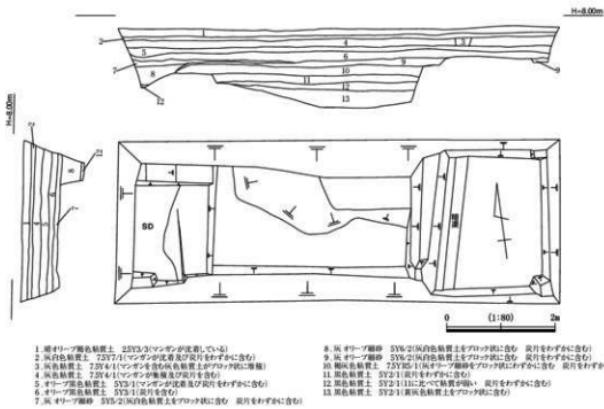


第3図 大辯遺跡第1トレンチ実測図

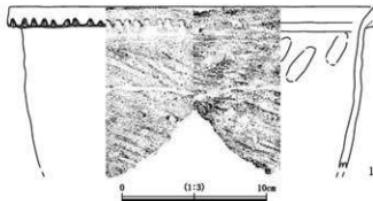
ない。次に第6層のオリーブ黒褐色粘質土と第7層の灰色粘質土までマンガンの沈着がみられる。第3層のオリーブ黒褐色粘質土が第6層上面で第4層上面から掘り込まれた南北に延びる暗渠排水施設が敷設されている。第8層の灰色粘質土と第9層の灰色粘質土は、灰白色粘質土をブロック状に含んでいる。第10層の灰色粘質土は灰白色細砂をブロック状に含んでいる。第11層の灰白色粘質土は黑色粘質土をブロック状に含んでいる。第12層・13層は黑色粘質土で灰白色粘質土をブロック状に含んでいる。第6層以下の堆積状況はほぼ整って堆積し、第8層から第13層にかけて、粘質土をブロック状に含んでおり、動物の影響を受けているものと考えられる。なお、第6から13層まで遺物は出土せず、遺構も検出されなかった。

第2トレンチ(Tr2)(第2・4図 図版1)

第2トレンチは、第1トレンチから西に約60mの地点で、第1トレンチと同圃場に3.0×8.2mの東西トレンチを設定した。標高約7.8mから下、20cm前後の第1層の暗オリーブ褐色粘質土と第2層の灰白色粘質土は現代の耕作土で、次の第4層の灰色粘質土は現代の水田の床土であると想定した。第1から4層までの出土遺物は土師器や須恵器、瓦質土器、陶磁器類などの細片で、時代は安定しない。第5層のオリーブ黒色粘質土と6層のオリーブ黒色粘質土は、マンガンの沈着と炭片がみられる。第3層の灰色粘質土が第5層上面で第4層上面から掘り込まれた南北に延びる暗渠を確認した。第7層の灰オリーブ細砂は炭片や灰白色粘質土をブロック状に含み、トレンチの西部に堆積している。第7層下面で、第8層のSDを検出した。第9層の灰オリーブ細砂は、炭片や灰白色粘質土をブロック状に含み。溝状遺構は第10層の褐色粘質土と第11層の黒色粘質土を切るように堆積している。第10層は、灰オリーブ細砂をブロック状に含む。第11層から13層の黒褐色粘質土は炭片や黄褐色粘質土をブロック状に含んでいる。第5層以下の堆積状況は西側を除けば、ほぼ整って堆積している。また、第7層から第13層にかけて粘質土をブロック状に含んでおり、動物の影響を受けているものと考えられる。今回、検出したSDの深さは50cmほどで南北に延びる。なお、トレンチを横断していたため、全体の把握が出来ず、詳細



第4図 大柄遺跡第2トレンチ実測図



第5図 大柄遺跡第2トレンチ出土遺物実測図

な規模については不明である。

出土遺物[第5図 図版15]

出土遺物は第7層・第9層から縄文土器が出土している。(1)は、口縁部に突帯が巡り、突帯の下位には刻み目は施され、刻み目には押し引きによる圧痕がみられる。体部の両面には条痕が確認される。口縁部の内面にナデによる調整がみられ、時期については縄文時代晚期後半にあたると考えられる。

小結

試掘調査の結果で、第2トレンチから溝状遺構が検出された。さらに、縄文時代晚期後半と思われる縄文土器が出土している。これまでの大柄遺跡の発掘調査でも、同時期の縄文土器が出土しており関係性が窺える。検出した遺構の性格から、周辺にも遺構が遺存する可能性を否定できることから周辺の開発事業には注意が必要である。

参考文献

- 山田真宏 2012「大柄遺跡」財團法人鳥取市文化財団
谷口恭子 2017「里仁古墳群」公益財團法人鳥取市文化財団

第2節 史跡鳥取藩主池田家墓所

鳥取藩主池田家墓所は、元禄6年(1693)鳥取藩32万石の初代藩主「池田光仲」の廟所として築かれ、袋川中流域右岸の鳥取市国府町奥谷の山麓が選地されている。墓所には、初代光仲以降も墓所として11代藩主「池田慶栄」までの藩主を中心に藩主正室・分知家である「東館」・「西館」の当主、子女などを含めて78基の墓碑が見られ、廃絶後も組織的な手厚い管理のもとで現在に至っている。

この藩主の墓碑は、二代藩主「綱清」墓の墓碑を除き、玉石垣を巡らした埋葬墓の中心上に三段の台石を重ね、その上に亀を象った「亀趺」と言われる台石を載せ、柱頭部を円く加工した扁平の墓標を据えている。これを総称して「亀趺門頭の墓碑」と呼び、特徴的な歴代藩主の墓石群が整然と建ち並んでいる様は、江戸時代における大名家の葬法や階層別による墓制を伝える極めて貴重な遺跡として、昭和56年10月13日付けて国の指定史跡となっている。又、現在は解体されて現存していないが、幕末期に描かれた「鳥取藩政資料」として残る「奥谷御廟所図」には廟所の建屋、廟門、回廊の立ち並ぶ様が描かれており、明治に写されたと思われる古写真でもその一部を確認することができる。

廟所が所在する丘陵周辺は、往古から人の営みが遺跡として見られる地域で、北西に「岩谷古墳群」、いわだにこふんぐん「卯垣古墳群」、おがにこふんぐん「奥谷古墳群」、袋川沿った南東に「亀金丘古墳群」、かめのかねこふんぐん石室内に魚が線刻されていることで著名な鷺山古墳を含む「町屋古墳群」が展開している。また、南の丘陵を介した隣接地には因幡一ノ宮として崇拝されている「宇倍神社」、文武天皇に仕えた「伊福部德足比売」の骨蔵器(重要文化財)が埋納されていた墓跡、袋川を介して南西の水田部には「因幡国守跡」が所在している。

今回の発掘調査は、墓所指定地内の史跡整備事業に伴う事前試掘調査で、経年による埋没構造を確認するため、墓碑の周辺に9箇所のトレントを設定し垂直的に調査を行った。

第1トレント(Tr 1)(第7図 図版2)

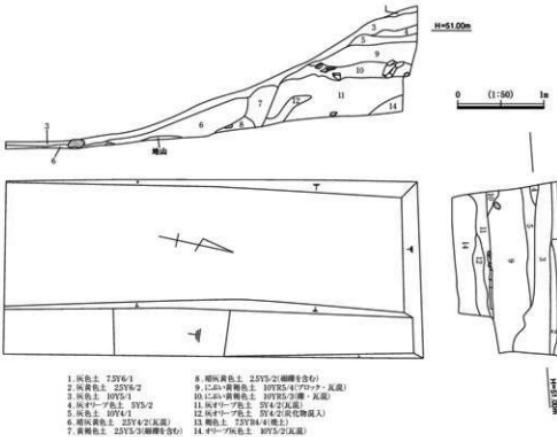
当該地は、東館初代「仲澄」墓の墓碑後背地で、急傾斜の北丘陵裾部を切り崩すことによって墓域となる平坦面の拡張事業がなされていると思われる。これを裏付けるように前述の奥谷御廟所図には墓所の後背地には石垣が描かれている。しかし、経年の流入土により墓所を巡る丘陵裾部は大量の土砂で埋没していると推定され、墓域を区画する玉石垣背後の石垣、かつて機能していたであろう排水溝の有無を確認することを目的としている。

第1トレントは、発掘調査作業域を確保するために「東館初代：仲澄」墓の墓碑を巡る玉石垣の後背地を避けて西に軸を寄せて、20×50mの南北トレントを設定し、地表下1.2mまで掘り下げた。また、地表下約0.8mまで掘り下げた所で、多量の瓦溜まりが検出されたことから、遺構の保護を優先してトレントの幅を1.5mに縮小した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約7cmの薄厚でトレント北側の一部に堆積する灰色の表土で、丘陵からの流入土である。第2層は、層厚約10cmで北側の一部に見られる灰黄色土で、丘陵からの流入土である。第3層は、層厚約10~15cmで傾斜面に沿って堆積し、墓碑を巡る玉石垣まで広がる灰色の表土である。第4層は、層厚約10cmの灰オリーブ色土である。第5層は、層厚5~15cmの灰黄色土である。第6層は、層厚3~30cmの暗灰色土で廟所に関連する建屋に葺かれていたと思われる瓦片を包含する。第7層は、層厚約45cmで細繙を多く含む黄褐色土である。第8層は、層厚約15cmで細繙を含む暗灰黄色土である。第9層は、層厚15~25cmで黄色ブロックを含むにぶい黄褐色土中に瓦片を包含する。第10層は、層厚10~15cmで第9層より暗くにぶい黄褐色土中に中繙の割石と瓦片を包含する。第11層は、層厚10~45cmで南側に厚く堆積し、細繙を含む灰オリーブ色土中に多量の瓦片を包含する。第12層は、層厚約10cmで第11層中に介在し、炭化物を多く含む灰オリーブ色土である。第13層は、トレントの北側に所在する層厚約10cmで炭化物を含む褐色の焼土である。第14層は、トレントの北側に所在する層厚20~30cmのオリーブ灰色土で、瓦片を含む。第14層の下層は、平面整地が施されたと思われる明黄褐色系の地

第6図 池田家墓所 調査トレンチ位置図





第7図 池田家墓所 第1トレンチ実測図

山である。

丘陵裾の堆積土は、廃絶期まで廐所関連の建屋に葺かれていたと思われる多量の瓦、鉄釘、灯明皿に転用したと思われる土師器の坏等を含む土砂が廐棄されており、土色、土質にも差異が認められることから、建物の塗り壁も含まれている可能性も考えられる。

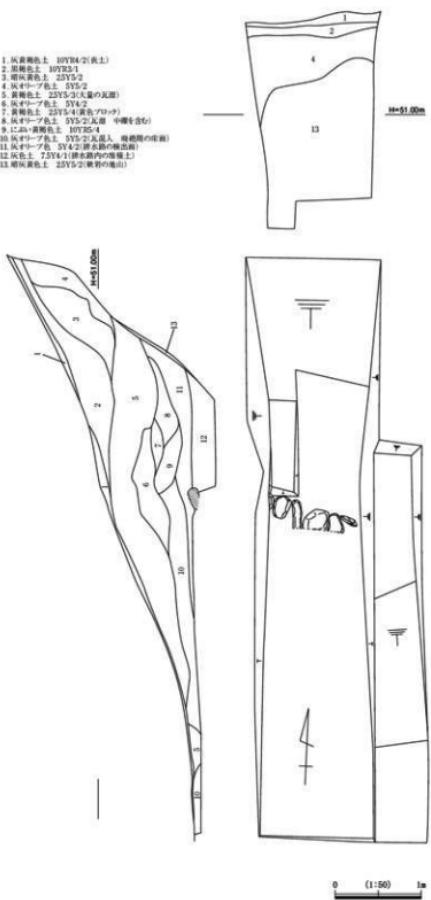
第2トレンチ (Tr. 2) (第8図 図版2・3)

第2トレンチは、二代藩主「綱清」墓の墓碑を巡る玉石垣と東側に隣接する「鎌子」墓の墓碑との間の後背地で、急傾斜の丘陵から墓域を区画する両墓碑の玉石垣内まで多量の土砂が流入している。第1トレンチと同様に後背地の石垣、排水溝等の有無を確認することを主目的に、 $2.0 \times 4.5\text{m}$ の南北トレンチを設定した。地表下約0.5mまで掘り下げたところで多量の瓦溜まりが検出したことから、遺構の保護を優先してトレンチの幅を1.5mに縮小して更に地表下1.5mまで掘り下げた。しかし、第1トレンチと同じく厚く堆積した土砂によって丘陵裾の地山面を検出することができなかったことから、トレンチを更に北側へ $20 \times 1.5\text{m}$ の範囲で拡張し、地表下1.6mまで掘り下げて遺構の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm以下で薄厚の灰黄褐色を呈する表土である。第2層は、丘陵からの流入土で、層厚約10~40cmの黒褐色土である。第3層は、層厚約50cmの暗灰黄色土で上方からの流入土である。第4層は、層厚約50cmの灰オーブ色土である。第5層は、層厚25~50cmで黄褐色土中に廐所の廐絶期のものと思われる廐棄された多量の瓦片、多くの鉄釘の混在が見られる遺物包含層である。第6層は、層厚20~30cmで灰オーブ色土である。第7層は、層厚約15cmで黄色ブロックを含む黄褐色土である。第8層は、層厚約30cmで中礫を含む灰オーブ色土で瓦片を包含する。第9層は、層厚約20cmにぶい黄褐色土である。第10層は、層厚10~20cmの地山面に載る灰オーブ色土で、層中に瓦片を包含し廐所が廐棄された時期の活動面と考えられる。第11層は、層厚10~30cmの灰オーブ色で丘陵裾に敷設された排水溝の検出面である。第12層は、層厚約25cmで灰色の丘陵裾に掘られている排水溝に堆積した埋土である。

奥谷御廐所図に描かれている北側後背地に見られる石垣は確認されなかつたが、暗灰黄色を呈する地

1. 黄褐色土 10YR4/6(表土)
2. 黄褐色土 10YR2/4
3. 墓灰褐色土 23Y3/2
4. 黄褐色土 23Y3/2
5. 黄褐色土 23Y5/3(人骨の灰面)
6. 黄褐色土 5YV4/2
7. 黄褐色土 10YR4/2(柱)
8. 黄褐色土 5YV2/2(瓦層 中磚を含む)
9. じぶん(黄褐色土 10YR2/4)
10. 黄褐色土 10YR4/2(人骨の灰面、発掘時の作面)
11. 黄褐色土 5YV4/2(骨盆部の灰面)
12. 黄褐色土 23Y5/1(骨盆部の砂層)
13. 黄褐色土 23Y5/2(骨盆部の砂山)

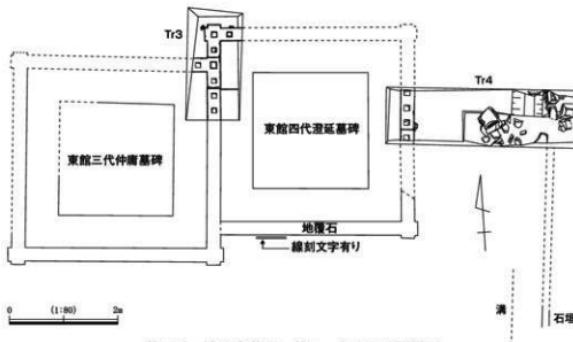


第8図 池田家墓所 第2トレンチ実測図

山面を大きく切り込んで丘陵及び周辺からの雨水等を受けることで、墓所地内への冠水を防ぐ排水溝が検出された。また、第1トレンチと同様に廟所関連の建物等の廃絶期に廃棄されたと推定される瓦溜を検出し、共伴する鉄釘、灯明皿に転用された土師器の壊の他に淡い朱色で水銀を含む漆喰状の固形塊が検出された。

排水溝

排水溝は、丘陵裾で軟岩質の地山を掘り込んだ排水溝で、丘陵裾部に沿って東西に掘り込まれているものと推定され、検出面上面幅約1.5m、底面幅約1.0m、深さ約30cmを測る。排水溝南側の縁は護岸となる30cm前後の扁平で円みを帯びた河原石が丁寧に配列されている緑石を確認したが、北の丘陵面側には特に崩壊の防止を目的とする石垣等の構造物は遺存していなかった。



第9図 池田家墓所 第3・4トレンチ配置図

第3トレンチ(Tr3)(第10図 図版3・4)

第3トレンチは、三代藩主「吉泰」墓の墓碑東側に所在する東館三代「仲庸」墓と東館四代「澄延」墓の両墓碑の間で、地覆石の一部は実見できるが、共に墓石を巡ると推定される玉石垣の親柱と子柱は抜き取られ、後背地は多量の土砂で埋没していることから、遺存しているであろう地覆石の配置状況は不明となっている。この地覆石の遺存状況等を確認するため、両墓碑の間に10×20mの南北トレンチを設定し、地表下1.0mまで掘り下げた。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚15~45cmの黄褐色土で軟質の中疊を多く含む表土である。第2層は、層厚0.5~30cmで灰オリーブ色の粘質土で小礫を含む。第3層は、層厚約30cmで第2層よりやや明るい灰オリーブ色の粘質土ある。第4層は、層厚約20cmで第3層よりやや暗い灰オリーブの粘質土で小礫を含む。第5層は、層厚約10cmの黄褐色土で小砂礫を含む。

堆積土中に地山から剥落した小礫が含まれており、継続的に上方からの流入土が堆積したものと思われ、堆積土下からは、遺存状態の良好な地覆石が確認され、玉石垣が差し込まれていた溝穴等の損傷も見られない。玉石垣の柱は流入土が堆積する以前に全てが抜き取られていたものと思われるが、石材等の移転場所は不明である。

地覆石

検出した地覆石は、「南田石」と呼ばれる福部町南田から産出される淡い緑がかった比較的加工が容易な特徴を持つ凝灰岩で、幅、高さ共に25.0cmで面取りが施され、上面には27.0cmの間隔で子柱の勝穴加工

が施れ、各四隅には親柱が建つ。両墓碑の地覆石は、墓碑最下部の台石と0.6mの間隔を保ちながら墓碑を巡るように配置され、良好な遺存状況で敷設されている。

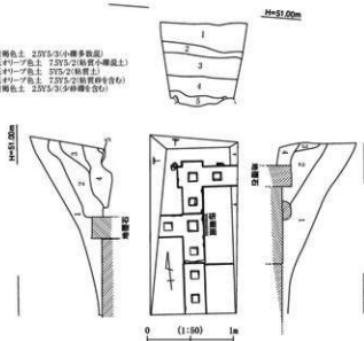
しかし、両墓碑はほぼ同規模の墓碑でありながら、東館三代「仲庸」墓の墓碑に比して東館四代「澄延」墓の墓碑は北側の後方へ57cm控えるかのように位置しており、仲庸墓碑の東側地覆石に澄延墓碑の西側地覆石を接合することで共用を図っている。施工方法は、仲庸墓碑の南東角に澄延墓碑の南側地覆石を隙間に接合する後付けが施され、仲庸墓碑の北東の角に澄延墓碑の地覆石として北側に継ぎ足して澄延墓碑の北西角を構築している。この過程で、加工前に遺存していた仲庸墓

碑の北東角に相当する地覆石の角柄は丁寧に削り取られて研磨が施されている。この地覆石(玉石垣)を共用させていることで、「仲庸」墓の墓碑が築かれた後に澄延墓碑が築かれていることが分かる。

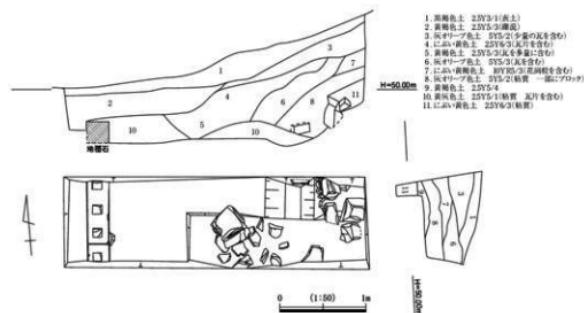
第4トレンチ(Tr 4)(第11図 図版4・5)

第4トレンチは、三代藩主「吉泰」墓に近接する東館四代「澄延」墓の東側に設定し、第3トレンチで確認している地覆石の状況確認、東側の小段丘裾部の一部に門んで見られる排水溝の埋没状況等を確認するために10×3.5mの東西トレンチを設定し、地表下1.2mまで掘り下げた。

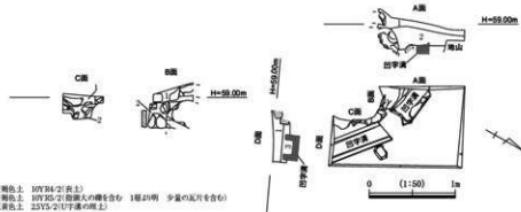
基本的な土層の層序は、第1層が層厚10~35cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚約30cmで傾斜面からトレンチ西側の平坦面への移行面に所在する黄褐色土で礫を多く含む。第3層は、層厚約30cmでトレンチ東側の斜面に所在する灰オリーブ色土で少量の瓦片を包含する。第4層は、層厚10~20cmでにぶい黄色土中に瓦片を包含する。第5層は、層厚20~30cmで黄褐色土中に多量の瓦片を包含する。第6層は、層厚20~40cmで灰オリーブ色土中に瓦片を含む。第7層は、層厚約20cmでにぶい黄褐色土中に花崗岩粒を含む。第8層は、層厚20~50cmで灰オリーブ色の粘質土中にブロックを含む。第9層は、層厚



第10図 池田家墓所 第3トレンチ実測図



第11図 池田家墓所 第4トレンチ実測図



第12図 池田家墓所 第5トレーンチ実測図

約10cmでトレーンチの東側の一部に所在する黄褐色土である。第10層は、層厚20~30cmで墓碑を巡る地覆石の検出面で、排水溝の底面から堆積している黄灰色の粘質土で瓦片を包含する。第11層は、層厚約20cmで排水溝の縁に相当する黄灰色の粘質土である。

第3トレーンチで検出された墓碑を巡る地覆石は、良好な状態で遺存しており、トレーンチ東側の小段丘裾部では崩壊が進んだ排水溝を検出したが、当該墓所を巡る排水溝に接続するものかは定かではない。

第5トレーンチ(Tr 5) [第12図 図版5・6]

第5トレーンチは、墓所で最も奥まった南の丘陵斜面を更に鋭角的に削り込むことで、基底面を拡張して小高い廻所を造成した五代藩主「重寛」墓、六代藩主「治道」墓、七代藩主「齊邦」墓の墓碑が所在する区域で、削り込まれた南東側の後背地に高さ約3mの石垣が築かれている。しかし、経年の劣化等で膨らみ崩壊の危機にであることから、改修に向けて石垣の基底部に根石の有無を確認するため、クランク状に屈曲する石垣の隅で、七代藩主「齊邦」墓を巡る玉石垣に近接する1.0×1.5mの南北トレーンチを設定し、比較的浅い地表下0.5mまで掘り下げた。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約10cmの灰黄褐色で、石垣の剥片が混在する表土である。第2層は、層厚約20cmの灰黄褐色土で第1層より明るく、層中に少量の瓦片と指頭大の礫を含み石垣基底部の根石検出面で、南田石を凹の字状に加工した排水溝の検出面でもある。第3層は、層厚約13cmで凹字溝の排水溝に堆積した埋土である。第4層は、黄褐色の硬い地山である。

石垣の基底部となる根石は硬い地山を掘り込んでいるが、現地表面からは比較的浅く、扁平で人頭大的割石を石垣本体よりやや外方へ突出させて置かれており、根石に接して敷設されている凹字状溝も検出された。

凹字状溝

検出された凹字状溝は、前述の凝灰岩質の南田石を丁寧に凹字状に彫込み、縁部は面取りも施されている。凹字状溝は単品を接続したものと思われるがトレーンチ外まで達していることから1ブロックの全長は分からない。外径断面の幅24cm、高さ16cm、の石材を幅16cm、深さ9cmに彫り込んでいる。敷設は、特に碎石等を敷いて基礎固めを施したものではなく、地山を掘り込んで据え付けたもので、屈曲した石垣の根石に沿わせ、曲部では内角を鎌歛状の工具で直線的に切断することで曲面が隙間無く接合するように行われ切られたものと考えられるが、対面する西側の凹字状溝は一部が欠損している。

凹字状溝の規模から推定される排水量は、比較的少ないものと思われるが、石垣から染み出る程度の常時的な水量を送水する許容量は満たしていると思われる。

第6トレーンチ(Tr 6) [第13図 図版6]

第6トレーンチは、六代藩主「治道」墓の後背地に位置する野面積の石垣上部で、石垣の構築に伴う控え石(繰り石)の有無を確認するため、1.0×1.5mの南北トレーンチを設定し、比較的浅い地表下0.5mまで掘

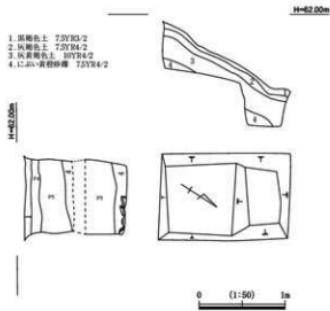
り下がった。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約5cmの黒褐色で上方からの流入土である。第2層は、層厚5~10cmの灰褐色土である。第3層は、層厚25~30cmの灰黄褐色土で数点の瓦片を含む。第4層は、石垣を覆う最下層のにぶい黄褐色の砂礫土で底面に拳大の角礫が詰め込まれていた。

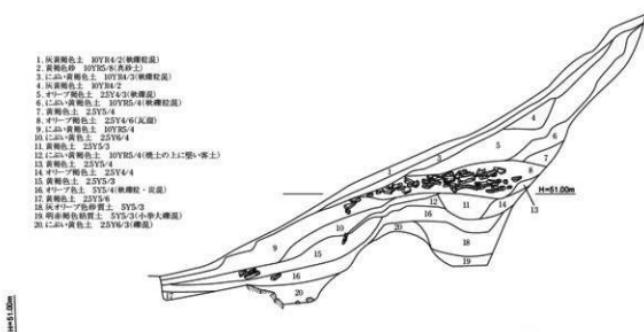
第7トレンチ(Tr 7)(第14図 図版6・7)

第7トレンチは、第2トレンチで検出された排水溝の延長を確認するために、三代藩主「吉泰」墓の墓碑を巡る玉石垣の北側に20×5.7mの南北トレンチを設定し、地表下約1.7mまで掘り下げて堆積状況と遺構の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5~10cmで灰黄褐色に腐食した表土で、北丘陵部からの流入土である。第2層は、薄厚の黄褐色土で近年玉石垣を修復した際の覆土と思われる。第3層は、層厚約10cmの花崗岩粒が混入するにぶい黄褐色土でトレンチの中程に堆積している。第4層は、凹地に堆積した層厚約20cmの灰黄褐色土である。第5層は、層厚10~35cmの軟礫が混入するオリーブ褐色土で、廻所の解体後に丘陵上部から流入したものである。第6層は、層厚5~15cmで軟礫が混入するにぶい黄褐色土で、廻所の解体後の比較的早い時期に丘陵上部か



第13図 池田家墓所 第6トレンチ実測図



第14図 池田家墓所 第7トレンチ実測図

ら流入したものである。第7層は、黄褐色で廐所の解体後最初に丘陵上部から流入したものである。第8層は、層厚20~40cmのオリーブ褐色で廐所の解体時に廐棄されたと思われる大量の瓦片と玉石垣の破片が混在しており、鉄釘も見られたことから木材も含まれていたと思われるが、特異なものとしては朱色で水銀を多量に含む漆喰片状の固形塊も検出されている。第9層は、層厚5~30cmのにぶい黄褐色土で量的には少ないが瓦片が混在している。第10層は、層厚5~15cmのにぶい黄色土で数点の瓦片が混入する。第11層は、層厚約30cmで幅約60cmに掘られた簡易的な溝に堆積したものである。第12層は、薄厚のにぶい黄褐色土で堅く締まった第11層の掘上土と思われる。第13層は、量的に少ない黄褐色土で、第11層の掘上土と思われる。第14層は、層厚約20cmのオリーブ褐色土である。第15層は、厚約10~25cmの黄褐色土で少量の瓦片が混入する。第16層は、層厚5~15cmのオリーブ色土で少量の瓦片が混入し、一部に炭化物が認められる。第17層は、薄厚で墓所の造成時面と思われる。第18層は、灰オリーブ色で排水溝に堆積した砂質土である。第19層は、排水溝の護岸と排水溝に流入した灰オリーブ色土で拳大の礫を含む。第20層は、にぶい黄色土で礫が多く混入する地山である。

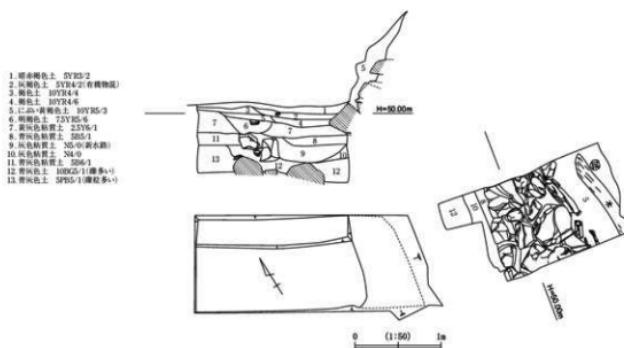
排水溝は、素掘りで底面幅約50cm、肩幅約90cm、深さ約45cmを測り、軟岩質の丘陵裾を丁寧に削って雨水等を通水する構造になっている。また、排水溝の堆積状況から、当初に掘られた排水溝が埋没後に簡易な排水溝が掘られ、更に埋没後に廐所の廐棄期を迎えた過程も見られる。

排水溝は、第2トレンチで検出された排水溝に接続するものと思われるが、第2トレンチで検出している人頭大の河原石を用いて石列状に配置する護岸ではなく、素掘りに等しい構造であることから、第2トレンチと第7トレンチの間での工法に差違が生じおり、墓碑の築造にあたっては、その都度に排水溝が掘られたことで、一貫した構造にならなかったことも考えられる。その要因として8m程度トレンチ間で第2トレンチは南側へ、第7トレンチは北側へと排水溝の方線に僅かに差違が認められ、排水溝の底面は約60cmの落差が認められ第7トレンチで検出された排水溝の方が高い。

第8トレンチ(Tr 8)〔第15図 図版7・8〕

第8トレンチは、二代藩主「綱清」墓・三代藩主「吉泰」墓を主として墓所を画する東側の切り土斜面の裾で、排水溝の遺存状況を確認するために10×30mの東西トレンチを設定し、地表下約18mまで掘り下げて堆積状況と遺構の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10~20cmで腐葉土等が堆積した暗赤褐色土である。第2層は、



第15図 池田家墓所 第8トレンチ実測図

層厚約20cmの灰褐色土で、段丘状の裾にしみ出る雨水等が染み出ている。第3層は、層厚約10cmの褐色土で墓所造成時の客土である。第4層は、層厚10~20cmの排水溝上面に堆積した褐色土である。第5層は、東側の段丘状の下部に構築された石垣と排水溝護岸に堆積した層厚約15cmのにぶい黄褐色土である。第6層は、層厚約35cmの明褐色土で人頭大の礫が混入する。第7層は、層厚約50cmで黄灰色の粘質土である。第8層は、層厚約20cmで排水溝に堆積した青灰色の粘質土である。第9層は、層厚30~50cmの灰色粘質土で、当初の排水溝の底面に相当するが、排水溝が掘られた早い時期に転落した石垣を護岸に転用したものと思われる。第10層は石垣の転落後に堆積した灰色の粘質土である。第11層は、層厚約30cmで青灰色の粘質土である。第12・13層は、青灰色系に沈着した地山で礫を多く含む。

排水溝が構築された時期は不明であるが、掘られた当初からの流入土の堆積が認められ、排水溝の泥上げが行われたその都度に排水溝の形状が変わって行ったものと思われる。

第9トレンチ(Tr9)(第16回 図版8・9)

第9トレンチは、第8トレンチの調査区と同様の東側の切り土斜面から裾で、「東館四代澄延」墓の墓道の東側に近接している排水溝の遺存状況等を確認するため、1.8×5.0mの東西トレンチを設定し、地表下約13mまで掘り下げた。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10~15cmの黄灰色土で切り土斜面の裾に堆積した表土である。第2層は、層厚5~10cmの黄褐色土で、切り土の斜面に堆積した表土である。第3層は、第8トレンチから北側に続く切り土の斜面で、層厚約15~40cmのにぶい黄色土である。第4層は、排水溝上面に堆積した層厚5~15cmのにぶい黄褐色の粘質土である。第5層は、排水溝上面に堆積した層厚5~20cmの暗青灰色土である。第6層は、排水溝上面に堆積した層厚約10cmの青灰色の粘質土で瓦片が混入する。第7層は、層厚約30cmの黄褐色の粘質砂で瓦片が混在し、大面取柱の柱根埋設時に一部が掘り込まれている。第8層は、約20cm程度の凹地に堆積した暗青灰色粘質砂混土である。第9層は、杭の抜き取り後に堆積した層厚15cm以上の青灰色粘質土である。第10層は、杭の抜き取り穴に堆積した層厚約15cmの明褐色粘質砂で、瓦片が混入する。第11層は、層厚約35cmで排水溝に堆積した黄灰色の粘質砂で、当初の排水溝が埋没後、泥上げとともに掘られたものと思われる。第12層は、排水溝に堆積した層厚10~15cmの灰黄褐色の粘質土である。第13層は、大面取柱の柱根検出面で、当初の排水溝に堆積した青灰色粘質砂の埋土である。第14層は、層厚10~35cmの暗青灰色砂粒土で、大面取柱の柱根埋設時に掘り込まれたものである。第15層は、トレンチ東側の一部に見られる層厚10~20cmの暗灰黄色土である。第16層は、切り土斜面に見られる層厚35cm以上の暗オリーブ色礫混土である。第17層は、層厚10~20cmの黄褐色土中に拳大の角礫を含む。第18層は、層厚約20cmのにぶい黄褐色土中に拳大の礫が混在する。第19層は、拳大の角礫層である。第20層は、層厚約25cmのにぶい黄褐色土である。第21層は、層厚約20cmのにぶい黄褐色土である。第22層は、層厚15~20cmの灰色の粘質土である。

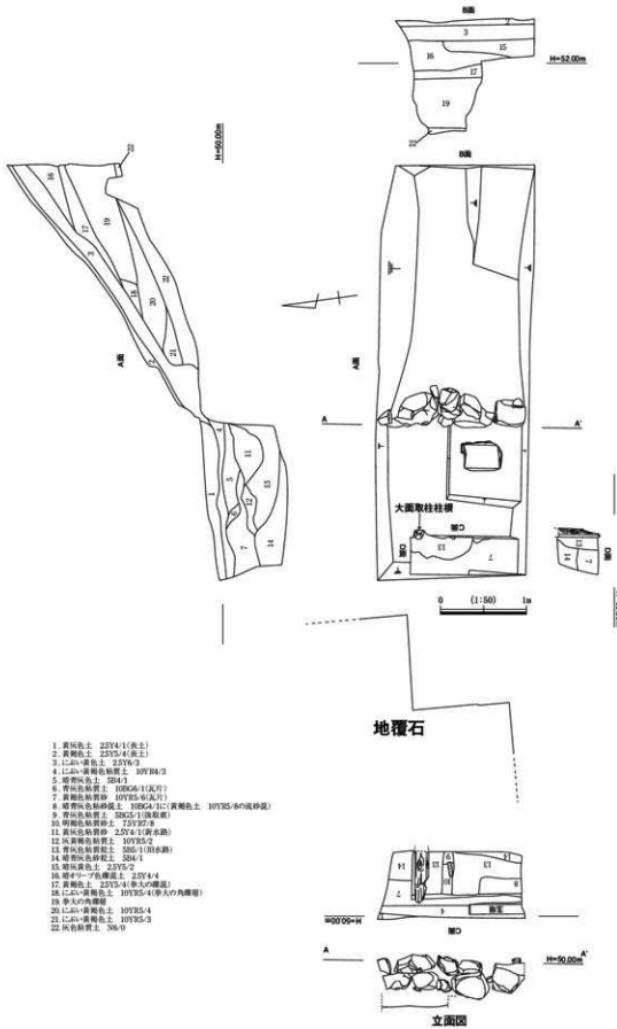
切り土の斜面では、粘質系土の上に山石と思われる角礫が厚く堆積し、更に黄褐色系土が覆い、これらの端部ににぶい黄色土が流入していた。

裾部では、排水溝が構築された当初のものと推定される石垣が遺存し、排水溝は埋没と泥上げが繰り返されていると思われ、西側護岸は当初の形状から変化して行ったと思われる。また、排水溝の護岸に相当する位置では、杭の抜き取り痕と後述の「大面取柱の柱根」の掘方か検出された。

大面取柱の柱根

大面取柱の柱根は、排水溝の護岸に相当する位置で検出され、約50×70cmの梢円形を呈する掘方の北側に寄せて建てられている。樹種はクリ材で直径13cmを測り、丁寧に角を切り落として大面取柱に施され、検出残存長は約60cmを測る。基底部は更に下層に達していると思われるが、上端部は朽ちているものの全体的な遺存状況は良好であった。

検出された大面取柱の柱根は、検出面と位置等から廃絶期まで見られた覆屋等に関連する柱と考えら



第16図 池田家墓所 第9トレンチ実測図

れるが、その柱の径から建物の主柱になるものとは考えにくいが、低湿地と同様の条件下である排水溝に接して埋設されていたことから、遺存状況は良好で池田家墓所地内で唯一の木柱根の出土例となった。

今回検出された大面取柱の柱根は、検出の位置、形状等の概略的な諸要件の確認が得られたことから検出時の現況を保存したまま不織布で養生し、今後の詳細調査に委ねることとした。

出土遺物[第17~23図 図版15~18]

出土遺物は、弥生土器、大量の瓦と共伴する土師器の壺、鉄釘、騎穴が空けられた木製品である。

(1)は、第1トレンチの第2層から検出された弥生土器で、造成時の二次的な搬入品と思われ、内傾する短い複合口縁の甕で、頸部以下を欠損する。口縁端部はつまみ出すように丸くおさめ、屈曲部の稜は外方へ下垂する。内外面共にヨコナデを施し、口縁部外面には3条の平行沈線が巡る。内面にナデを施すが、一部にヘラケズリの工具痕が認められ、外面には煮沸跡と思われる煤が付着している。(2)は、土師器の小皿で、内外面ともにヨコナデを施されている。



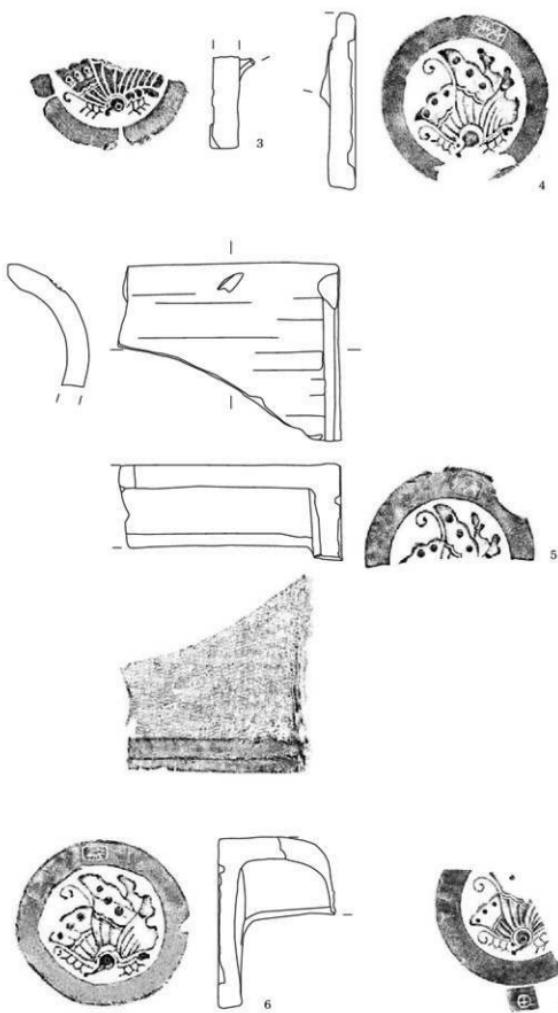
第17図 池田家墓所 出土遺物実測図(1)

各トレンチより出土した大量の瓦のうち国化し得たものは第18~22図、遺物番号(3~24)のみであり、(3~6・9~11・13・16・18)は第4トレンチ、(7・17・24)は第9トレンチ、(12)は第1トレンチ、(8・14)は第7トレンチ、(15・19~23)は第2トレンチ出土である。

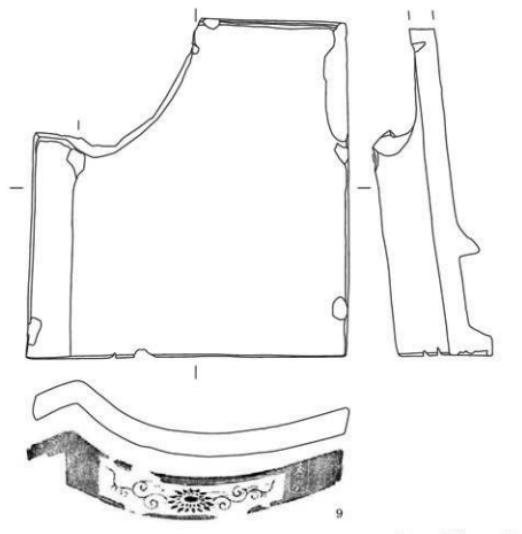
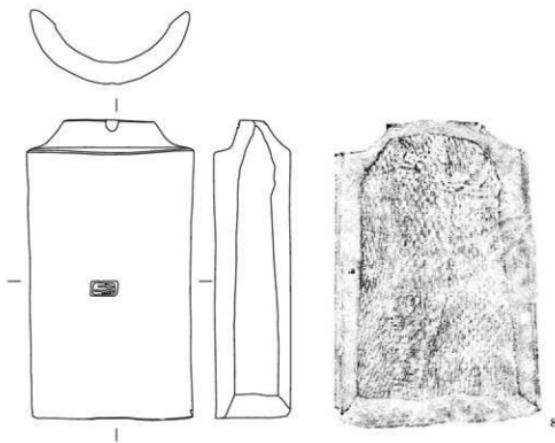
(3~7)は軒丸瓦、(3~6)は第4トレンチ3層出土。(3)は瓦の周縁部に切り込みを入れる特殊な瓦で、紋様は唯一の除削范である揚羽蝶紋F類。鳥取池田家の分知家である東館に使用されるもので、通常の範で製作した後、焼成前に切り込みを入れ五弁とする。19世紀代の瓦であるI類には散見されるが、18世紀代には使用されていたとみられるF類では初めての確認である。(4・5)は揚羽蝶紋I類の同范、(5)は瓦部分を20cm程残し、内面には布目痕を持つ。とともに周縁部に角開いの「文末」の刻印を押す。これは文化・文政年間の未年製を現わしており、候補としては1811年(文化8)、1823年(文政6)が挙げられる。(6)は揚羽蝶紋の最終形態であるI2類、蝶の形は大きく崩れており口吻は伸び、繊細さは失われる。范傷が著しく、周縁部に角開いの「作」の刻印する。(7)は、第9トレンチ5層出土、現在池田家墓所のみで確認し、鳥取城内では確認できていない2型の蝶紋の1つである。直線的な口吻等、形態的な特徴はI1に多くの共通点を持つ。難部に刻印(+)がされた例はこの1点のみである。

(8)は完形の丸瓦で第7トレンチ瓦溜出土。全長27.5cm、幅14.7cmを測り外面の中央付近には「作」の刻印、内面には布目痕が残る。

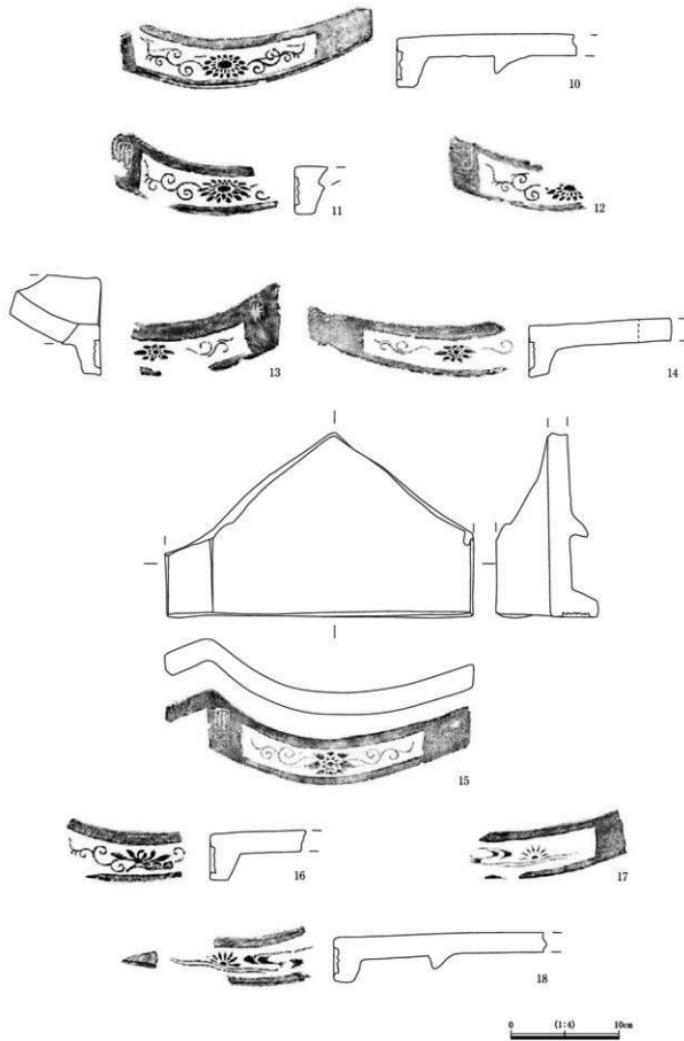
(9~18)は軒桟瓦。(9~11)は第4トレンチ3層、(12)は第1トレンチ瓦溜出土の軒平瓦o類。花弁を二重に配した花紋で(9・10・12)は同范の右桟瓦。(9)は長さ31.2cm、幅29.8cm、側区に「文辰」の刻印を持ち、裏面には断面三角形の滑り止めを付ける。(10)の裏面にも滑り止めが付く。(12)は桟部分を欠くが紋様より右桟とみられ、側区には「作」とみられる刻印の桟部分のみが残る。(11)は別范のo類で右桟瓦。花弁が若干尖り気味となり「作」の刻印を持つ。(13)は第4トレンチ3層、(14)は第7トレンチ瓦溜出土の軒平瓦t類の同范左桟瓦である。花弁を二重に配する花紋で、桟側へ向かい大きく立ち上がるのが特徴で、(13)の側区には「作」の刻印。(14)は桟部分を欠くが紋様より左桟とみられる。(15)は第2トレンチ出土の軒平瓦q類右桟瓦、幅28.3cmで「作」の刻印を持ち裏面に滑り止めを付ける。二重に花弁を配する花紋でp類に似るが、外側の花弁数がp類の9弁に対し、q類は8弁で、唐草の形態が異なる。(16)は第4トレンチ3層出土の軒平瓦t類の右桟瓦、上向きの花に小さな葉を付ける。(17)は第9トレンチ瓦溜出土の菊水紋軒平瓦で紋様より左桟瓦と推定される。(18)は第4トレンチ出土の菊水紋軒



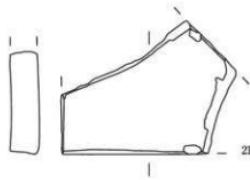
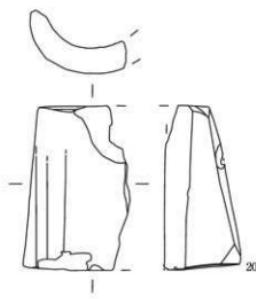
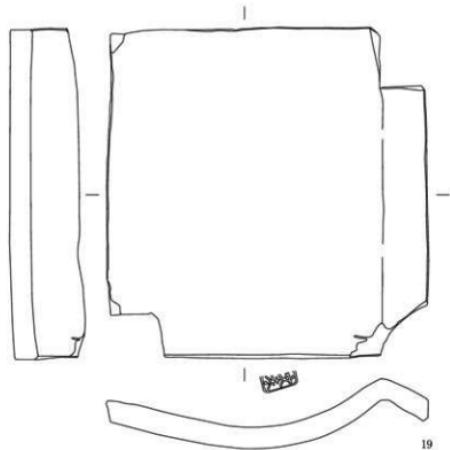
第18図 池田家墓所 出土遺物実測図(2)



第19図 池田家墓所 出土遺物実測図(3)

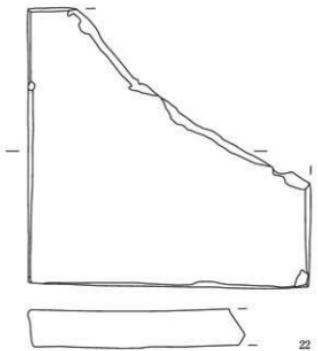


第20図 池田家墓所 出土遺物実測図(4)

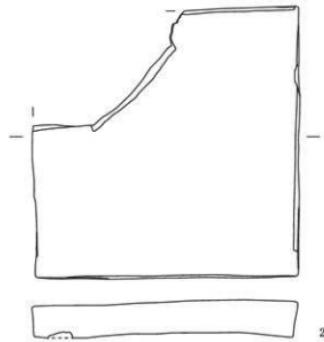


0 (1:4) 10cm

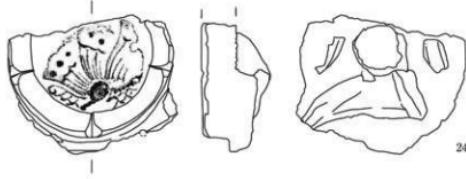
第21図 池田家墓所 出土遺物実測図(5)



22



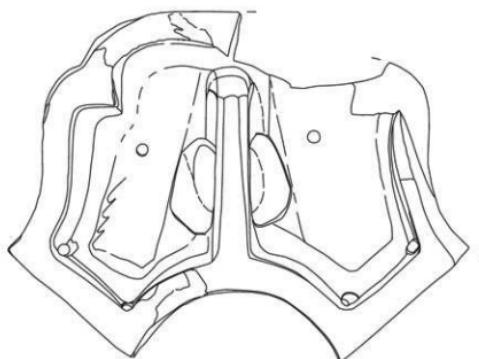
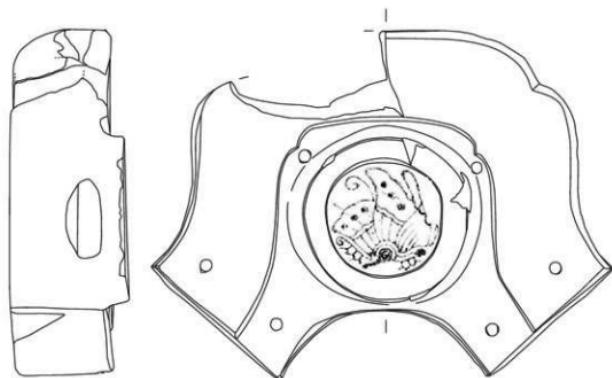
23



24

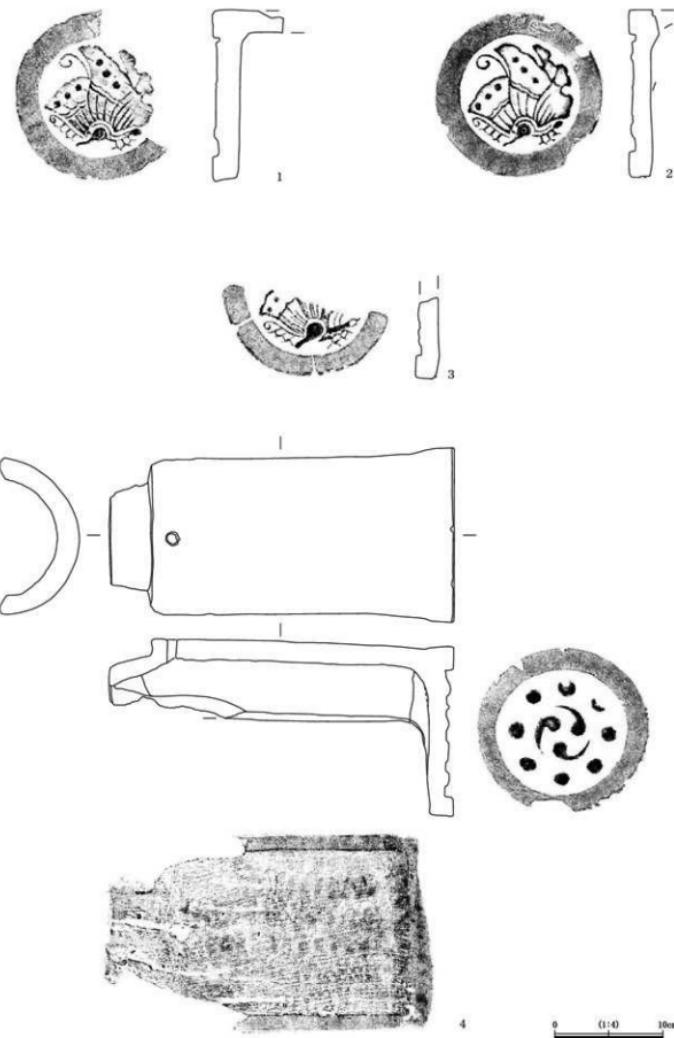
0 (1:4) 10cm

第22図 池田家墓所 出土遺物実測図(6)

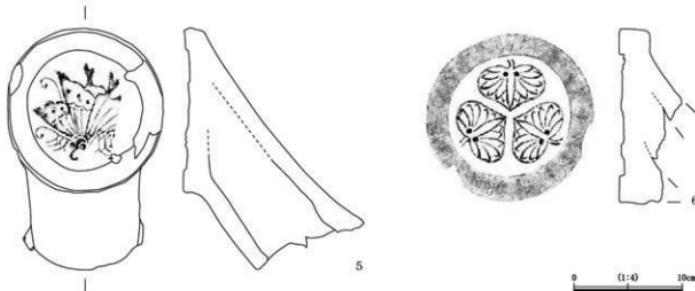


0 (1:4) 10cm

第23図 池田家墓所 管理事務所保管 瓦実測図



第24図 池田家墓所 県保管瓦実測図(1)



第25図 池田家墓所 県保管瓦実測図(2)

平瓦、(17)の配置と対称に配されるが同じく左線とみられる。(19)は第2トレンチ出土の左線瓦で長さ30.4cm、幅29.6cm、2角を切り欠き、小口には「文末」の刻印。

(20)は第2トレンチ出土の棟込瓦で長さ15.1cm。(21~23)は第2トレンチ出土の磚、(21)は厚さ2.7cm、(22)は長さ25.8cm、幅26.1cm、厚さ3.4cm、(23)は長さ24.8cm、幅24.5cm、厚さ3.0cmを測る。大凡25cm四方に3.0cm前後の厚みを持つ。城内よりの出土は僅かに数点を数えるのみである。

(24)は第9トレンチ5層出土の鬼瓦で(3)同様、周縁部を5弁にする東館仕様のものであり、蝶紋は池田家墓所のみで確認できる範である。紋様の崩れ方などI2類に通じる点が多いようにみられるが、脈の表現などが異なる。何にしても19世紀でも幕末に近い時期のものとみられる。

発掘調査出土の瓦とは別に、池田家墓所に使用されていたとされる瓦が、墓所内管理事務所と、鳥取県教育委員会にそれぞれ保管されている。墓所内での正確な採取位置は不明なれど、調査に合わせ、それらを実見する機会を得たため、ここにその実測図を掲載する。

池田家墓所管理事務所保管瓦[第23図・図版18・19]

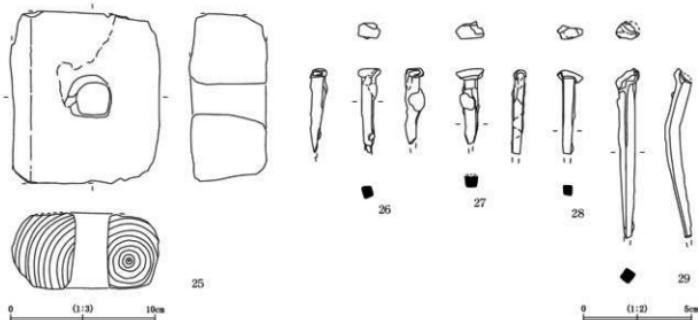
(1~3)は軒丸瓦、(1)の葵紋は1825年(文政8)に幕府より屋根瓦への使用が認められたものであり、現状確認できる5范のうち最も多く使用される範である。鳥取城では一定の出土量を認めるも、池田家墓所での発見は少ない。周縁部に「作」の刻印。(2・3)は第22図(24)と同范の、池田家墓所独自の范型で、周縁部に切り込みを入れて5弁とする。(2)には枠開いを持たない“嘉寅”の刻印がされ、これが嘉永寅年を指すならば1854年(嘉永7)が該当する。(4)は鬼瓦、中央の揚羽蝶紋はI2型で范傷が目立つ。長さ42.5cm、幅31.1cmの大型で、脚部分を組み合わせて棟で使用する仕様であり、裾にある直径1cm程度の横並びの孔に銅線を通すものである。

池田家墓所鳥取県保管瓦[第24・25図]

(1~4)は軒丸瓦、(1・2)は揚羽蝶紋I2類、(3)は第22・23図同様池田家墓所独自の揚羽蝶紋であり、周縁部に切り込みを入れ5弁とする。(4)は比較的の残りの良い巴紋で全長31.7cm、巴の頭が時計回りに巻き、珠紋は8個、内面には布目痕が残る。

(5・6)は鳥糞瓦、(5)は揚羽蝶紋D1類、他のI類に先行する範とみられ、蝶の形は比較的整っている。(6)は葵紋、第23図(1)同様最も多い范である。

第26図は試掘調査出土の木製品及び鉄釘である。(25)は、第9トレンチの排水溝の底面から検出されたもので、長さ12cm×幅10cm、厚さ5.0cmで樹種はヤマザクラである。横木取がなされ、形状を整えた



第26図 池田家墓所 出土遺物実測図(7)

後に平面の中心部に2.2cmの円形貫通孔を穿っている。何かの部材と思われるが、用途等は不明である。

(26~29)は、鉄釘で北側の丘陵裾に設定したトレンチから検出されたもので、各トレンチ共に数十本が出土している。鉄釘の頭部は、巻頭に加工しており、横断面が方形の打ち込み釘である。腐食に伴う地彫が見られ、大半は先端部が欠如している。残存長は、4~8cmのもので、基部の横断面は一辺0.5~0.8cmである。

小結

今回実施した史跡鳥取藩主池田家墓所の発掘調査は、墓所指定地内の史跡整備事業に先行する事前の試掘調査で、経年による埋没遺構面等の有無とその状況を確認することを主目的とし、二代・三代藩主の墓碑を中心とする区画に7箇所、六代・七代藩主の墓碑を中心とする区画内に2箇所のトレンチを設定し垂直的に調査を行った。

二代・三代藩主の墓碑を中心とする区画では、奥谷御廁所図に描かかれている北側の丘陵裾と東丘陵裾に見られる石垣と排水溝の有無を確認するため、経年の流入土等により埋没している可能性の高い丘陵直下に7箇所の試掘調査トレンチを設定し垂直的に調査を行った。

その結果、最も西側に設定したトレンチでは、膨大な流入土に阻まれ石垣、排水溝を検出することはできなかったが、北側の丘陵裾に設定した第2・7トレンチから、排水溝が検出された。東側の段丘斜面の裾部に設定した第4・8・9トレンチでは、腰高程度の石垣とその前面に排水溝が検出された。奥谷御廁所図に描かれている石垣は、北の丘陵裾、東の段丘状裾に描かれているが、北側にはその痕跡が見られないことから東側に見られる石垣の延長として丘陵法面を石垣に見立てて描かれたものと思われる。関連する排水溝は、各トレンチで検出されており接続するものと思われるが、トレンチ毎で形状、構造等が異なることから、墓地を造営する都度に延長されたことで構造等に差違が生じているものと考えられる。また、全てのトレンチで瓦溜まりが検出されているが、奥谷御廁所図、古写真に見られる廁所、門からの廁所、墓道上に築かれた瓦葺きで回廊状覆い屋等のものと思われることから、池田家墓所の廢絶期に解体されて廃棄されたものと推定される。

六代・七代藩主の墓碑を中心とする区画では、墓碑の南背後に築かれている石垣の彫み等の修復に向け、根石の有無と構造を把握するために石垣直下と石垣上部に各1箇所のトレンチを設定し垂直的に調査を行った。

石垣直下に設定した第5トレンチでは、安定した扁平の根石が据えられ、石垣の外側に沿って埋設さ



第27図 池田家墓所 地覆石に刻まれている文字 拓影

れた四字状の溝が確認された。石垣上面に設定した第6トレンチでは、拳大の角礫が裏込め石として詰め込まれており、石垣の上面には経年の流入土が厚く堆積する状況が見られたことで、修復工事への周知事項となった。

また、当墓所内では、墓石、灯籠以外に刻まれた文字は確認されていなかったが、今回の調査作業の過程で玉垣を差し込む地覆石に刻まれている文字が発見された。文字は、「東館四代澄延」墓碑を巡る玉石垣を建てる床石から下面に刻まれているが、地覆石を掘えた後に厚い床石が嵌め込まれていることから、地覆石の下部に刻まれている文字は床石の厚さに相当する部分に隠れて判読はできない。判読できる文字は、右から[石大… 越禹… 山内十…]まで読み取れ、推測の範囲であるが(石大工…、越州(北陸地方)、山内十(氏名))と思われ、墓碑、灯籠以外に職名、出身地、氏名が刻まれている極めて特異な例として紹介に至った。

引用・参考文献

国府町誌編さん・編集委員会『国府町誌』 国府町 2013

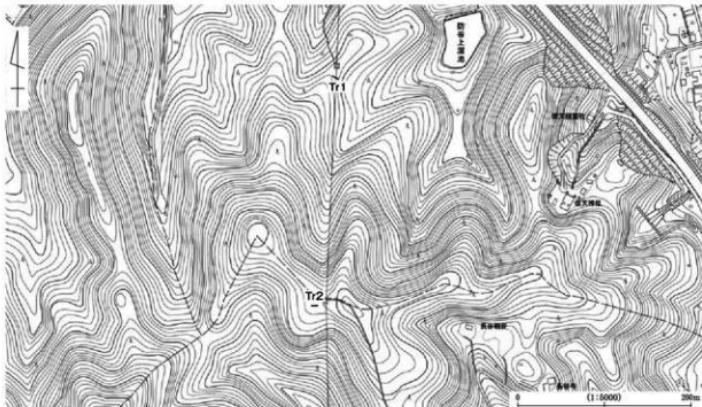
国府町教育委員会『町内遺跡発掘調査報告書』(柄本庵寺関連遺跡・史跡鳥取藩主池田家墓所に係る調査報告書) 2004

大野哲二『季刊考古学・別冊20 近世大名墓の世界』 雄山閣 2013

第3節 倭文所在遺跡

倭文所在遺跡は、鳥取県の三大河川のひとつである千代川の左岸に位置しており、鳥取自動車道(姫路鳥取線)の西丘陵に鎮座する倭文神社から更に西へ約250mの丘陵上に所在している。この丘陵東端の尾根上では、平成15年の鳥取自動車道整備事業に伴う事前の発掘調査で、倭文古墳群の8基と共に土坑墓、炉、中世の平坦面、堀、土塁等の遺構とともに多くの遺物が出土しており、古墳時代中期の所産と推定される三角板銅留短甲とその胸部中に納められていた横矧板銅留角付冑、鉄鎌のセットは特異な武具の出土例として着目されている。

今回の発掘調査は、中国電力(株)が設置運用している高圧送電線の鉄塔移設設計画に伴うもので、二基の現位置に隣接する予定地に各一ヶ所のトレーンチを設定し、遺構、遺物の有無等を確認した。

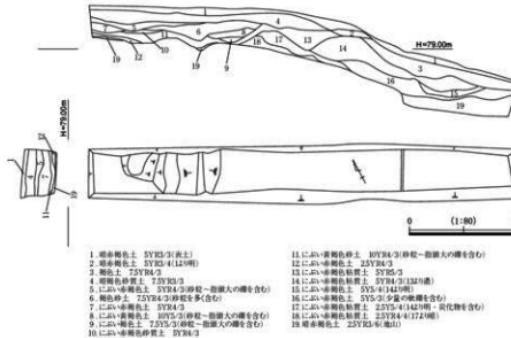


第28図 倭文所在遺跡 調査トレーンチ位置図

第1トレーンチ(Tr 1) [第29図 図版10]

第1トレーンチは、標高176mの山頂部から派生した稜線が緩やかな背状の尾根に変わって突出する標高75m付近の微高地に位置し、麓を南北に延びる県道鳥取河原線との比高差は約60mを測る。尾根頂部の北面は、麓まで廃園となった果樹園の痕跡が残り、この尾根頂部に1.0×8.0mの東西トレーンチを設定し、地表下約1.0mまで垂直的に掘り下げ、特にトレーンチ東側の一部を20~30cm深く掘り下げて土層の堆積状況を確認した。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚2~20cmで暗赤褐色の表土である。第2層は、丘陵肩部に堆積する層厚約10cmの暗赤褐色土である。第3層は、層厚10~30cmの褐色土である。第4層は、層厚10~25cmで暗褐色の砂質土である。第5層は、層厚5~15cmで砂粒~指頭大の礫を多く含むにぶい赤褐色土で、南西の丘陵上部からの流入土が堆積したものである。第6層は、層厚10~30cmで砂粒を多く含む褐色砂土である。第7層は、層厚10~20cmのにぶい赤褐色土である。第8層は、層厚約10cmで砂粒~指頭大の礫を多く含むにぶい黄褐色土である。第9層は、層厚約10cmで砂粒~指頭大の礫を多く含むにぶい褐色土である。第10層は、薄厚にぶい赤褐色の砂質土である。第11層は、層厚約10cm程度で地山



第29図 傷文所在遺跡 第1レンチ実測図

の上に堆積した砂粒・指頭大的礫を多く含むにぶい黄褐色の砂土である。第12層は、地山の上に薄く堆積したにぶい赤褐色土である。第13層は、丘陵の肩部に堆積する層厚10~35cmににぶい赤褐色の粘質土である。第14層は、丘陵の肩部に堆積する層厚5~50cmににぶい赤褐色の粘質土である。第15層は、丘陵の肩部に堆積する層厚約10cm程度ににぶい赤褐色の粘質土である。第16層は、少量の軟疊を含む層厚5~30cmににぶい赤褐色土である。第17層は、層厚10~20cmににぶい赤褐色の粘質土で、少量の炭化物が混入する。第18層は、地山の上面に堆積する層厚10~20cmににぶい赤褐色の粘質土である。地山は堅く締まった暗赤褐色土である。

遺構、遺物共に検出されなかった。

第2トレンチ(Tr 2)(第30図 図版10)

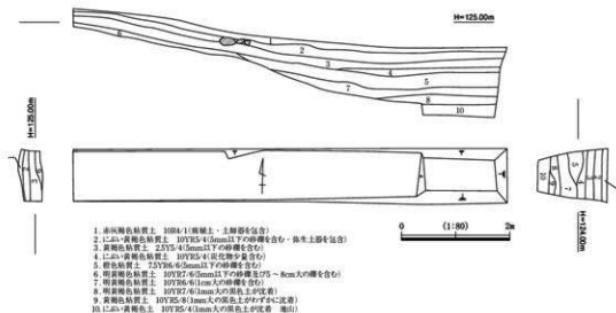
第2トレンチは、第1トレンチから急勾配が連続する中国電力の鉄塔管理道を登り詰め、県道郡家、鹿野、気高線を南方に俯瞰できる標高136mに位置し、県道鳥取河原線との比高差は約120mを測り、稜線上に10×8.0mの東西トレンチを設定した。調査では、地表下約1.0mまで掘り下げ、トレンチの東端を1.5×15mの範囲で更に約20cm深く掘り下げて垂直的に調査を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚10cm前後で暗赤褐色の粘質性腐植土である。第2層は、層厚約10~20cmでにぶい黄褐色の粘質土で、花崗岩の風化した砂粒を含み、層中でやや摩耗した弥生時代の土器片が検出された。第3層は、層厚10~30cmで黄褐色の粘質土に花崗岩が風化した砂粒を含む。第4層は、層厚10~15cmでにぶい黄褐色の粘質土で花崗岩の風化した砂粒を含む。第5層は、層厚15~25cmで橙色の粘質土に花崗岩が風化した砂粒を含む。第6層は、層厚10cm程度で明黄褐色の粘質土に花崗岩が風化した砂粒を含む。第7層は、層厚10~20cmで明黄褐色の粘質土中に花崗岩が風化した砂粒を含む。第8層は、層厚15~20cmで明黄褐色に沈着した粘質土中に花崗岩が風化した砂粒を含む。第9層は、トレンチ東側の一部に見られる層厚約10cmでやや沈着した黄褐色の粘質土中に花崗岩の風化した砂粒を含む。第10層は、層厚20cm以上ににぶい黄褐色の地山である。

遺構は検出されなかったが、第2層中で同一個体と思われる弥生時代の土器片が3点検出された。

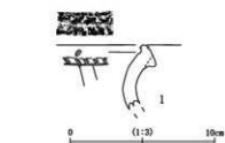
出土遺物(第31図 図版19)

出土遺物は、比較的浅い第2層中で検出された弥生時代後期の土器片である。(1)は、壺の口縁でラッパ状に開いた頭部を特徴とする弥生土器で、器壁が著しく摩耗していることから内面の調整は不明、外側はハケメ調整が微かに残る。下垂する口縁端部は粘土を貼り付けて肥厚させ、平に整形後、鋭利な工



第30図 倭文所在遺跡 第2トレンチ実測図

具で一条の細い沈線を施し、内外面の斜方向へ綾杉文状の刻みを施す。弥生時代後期の所産と思われる。



第31図 倭文所在遺跡 出土遺物実測図

小結

今回の調査は、高圧送電線の鉄塔移設設計画に伴うもので、移設予定用地内に設定した二ヶ所のトレンチで遺構、遺物の有無を確認するものであった。

第1トレンチでは、第13層を介して上層に砂礫等を多量に含む堆積が見られ、周辺の地形観察から尾根上部に土砂崩壊の痕跡が認められたことで、かなりの規模による土砂の流出と堆積が繰り返されていると思われる。下層では粘質系の堆積も見られるが、遺構、遺物共に検出されなかった。

第2トレンチでは、第2層で弥生時代の土器片が検出されたことで、遺構等の所在する可能性も考えられたが、第3層から下層では粘質系のはば安定した堆積を示しており、遺構等も検出されなかった。

周辺での地上観察では、トレンチからやや東方の高所で、運用中の高圧送電線の鉄塔の東に直径20m程度の高まりが認められ、墳丘である可能性もあることから、転落又は運用中の鉄塔建設に伴う造成時の排土中に混在していたものが当該地に流入していると考えられる。

参考文献

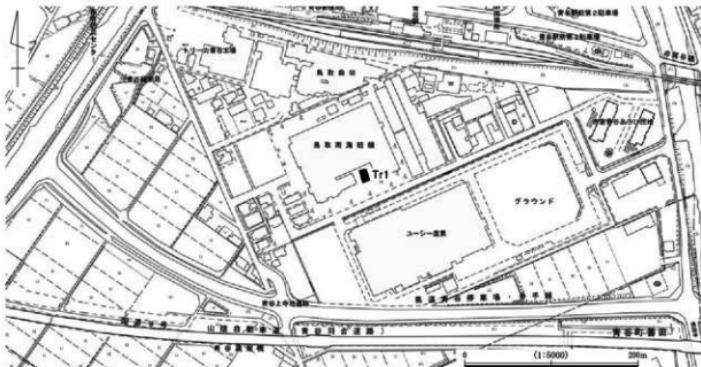
(財)鳥取市文化財団(2004)鳥取市倭文所在城跡・倭文古墳群

第4節 青谷上寺地遺跡

鳥取市青谷町青谷字上寺地(かに)に所在する青谷上寺地遺跡は、湯梨浜町との境を接する鳥取市の最も西に位置し、北は風光明媚な日本海に面して東西南を標高921mの鷺峰山、514mの鉢伏山山系から派生する丘陵が迫り、日本海沿岸に発達したラグーンの名残である湿地帯に位置している。

遺跡の発見は、山陰自動車道(青谷・羽合道路)の青谷改築工事等に先行する事前試掘調査で発見され、農耕、漁労等の生産活動等を裏付ける遺構や争いを物語る遺物が見つかっている。また、これらの遺構と継続的な定住生活から生まれた高い加工技術により製作された大量の土器、石器、木器等の用具から、弥生時代の生産活動や遠隔地との人の交流等について具体的に知ることのできる極めて貴重な遺跡であるとして、平成20年に約14haが国の史跡に指定されている。

今回の発掘調査は、遺跡の範囲からわずかに外れた「鳥取南海紡績株式会社」の敷地内で、工場改築事業を検討している当社のご好意とご協力の元に社屋の隣接地に一箇所の調査トレンチを設定した。事前のボーリング・標準貫入試験で確認されていた造成土(層厚約2.3mの真砂土)を旧耕作土面まで重機によって掘取りを行った。

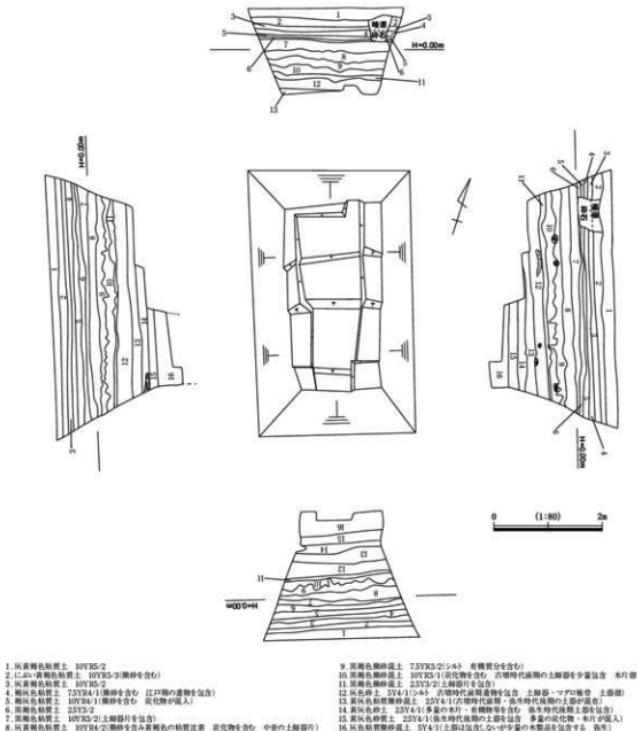


第32図 青谷上寺地遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)【第33・34図 図版10・11・12】

調査トレンチは、社屋が鉤状に屈曲した標高約3.6mの更地に9.0×15.0mの南北トレンチを設定し、造成土の掘取り後の旧表土面に3.0×5.0mの南北トレンチを設定し、手堀で垂直的に約2.4mまで掘り下げて遺構の有無、遺物の有無を確認した。従って本報告では、造成土を除いた旧耕作土の下位についての報告とする。

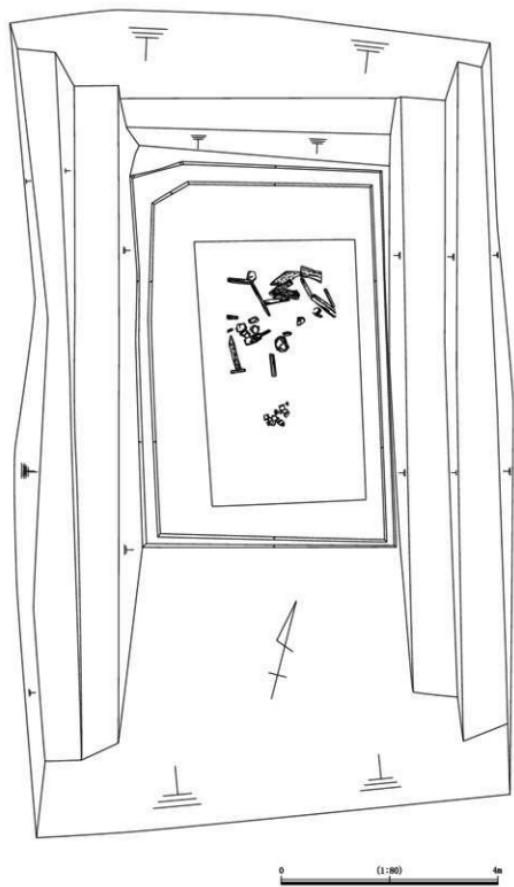
基本的な土層の層序は、上から第1層が層厚15~25cmの灰黄褐色粘質土で、土地造成前の水田の耕作土である。第2層は、層厚10~20cmで砂礫を含むにぶい黄褐色の粘質土である。第3層は、層厚5~15cmの灰黄褐色の粘質土である。第4層は、層厚5~10cmで黄褐色の粘質土に微砂を含み、江戸時代の遺物を包含する。第5層は、層厚5~15cmで炭化物が混入する褐灰色の粘質土である。第6層は、層厚5~15cmで黒褐色の粘質土である。第7層は、中世の土器片を包含する層厚5~10cmの黒褐色粘質土で、この層まではほぼ安定した堆積が見られる。第8層は、層厚10~25cmで灰黄褐色の粘質土で南から北方



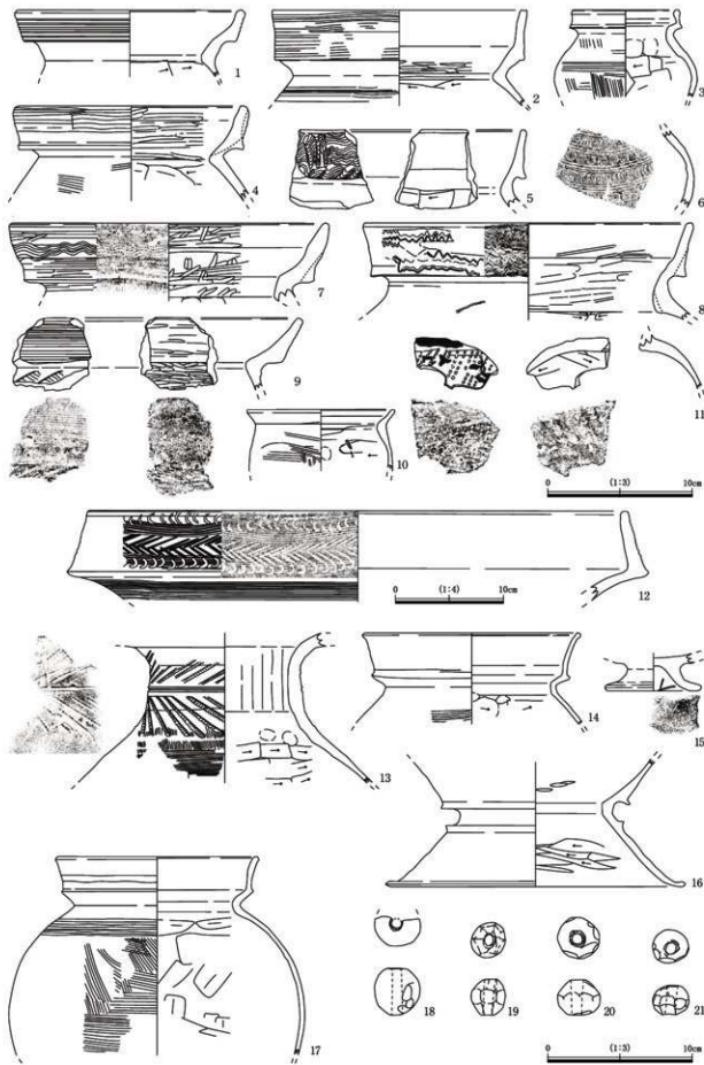
第33図 青谷上寺地遺跡 第1トレンチ実測図

向へ緩やかな流向が見られ、微砂と炭化物を含み中世の土器器片を包含する。第9層は、層厚5~20cmの黒褐色のシルトで有機質を含んでおり、上面には荷重痕が見られる。第10層は、層厚10~25cmで黒褐色の微砂混土で炭化物を含み、古墳時代の土器器・木片溜まりが検出された。第11層は、層厚5~10cmの黒褐色の微砂混土で土器器片を包含する。第12層は、層厚20~30cmで灰色の砂混土に古墳時代前期の遺物(土器器・マグロの椎骨)を多く包含する。第13層は、層厚15~30cmで黄灰色の粘質微砂混土で、弥生時代後期~古墳時代前期初頭の土器器片を包含する。第14層は、層厚15~20cmの黄灰色で弥生時代後期の土器を包含し、多量の木片等の有機質を含む。第15層は、層厚15~20cmの黄灰色粘土質土で、弥生時代後期の土器を包含し、木片、炭化物が混入する。第16層は、層厚50cm以上の灰色粘質微砂混土で無遺物であるが、少量の木片が混入する。

遺構は検出されなかつたが、土層の堆積状況からは下層に至るほど西方向から東方向へ緩やかな傾斜が見られ、浮遊物等の堆積が見られないことから汀線に相当する場所ではないと思われる。遺物の出土



第34図 青谷上寺地遺跡 第1トレンチ遺物出土状況実測図



第35図 青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(1)

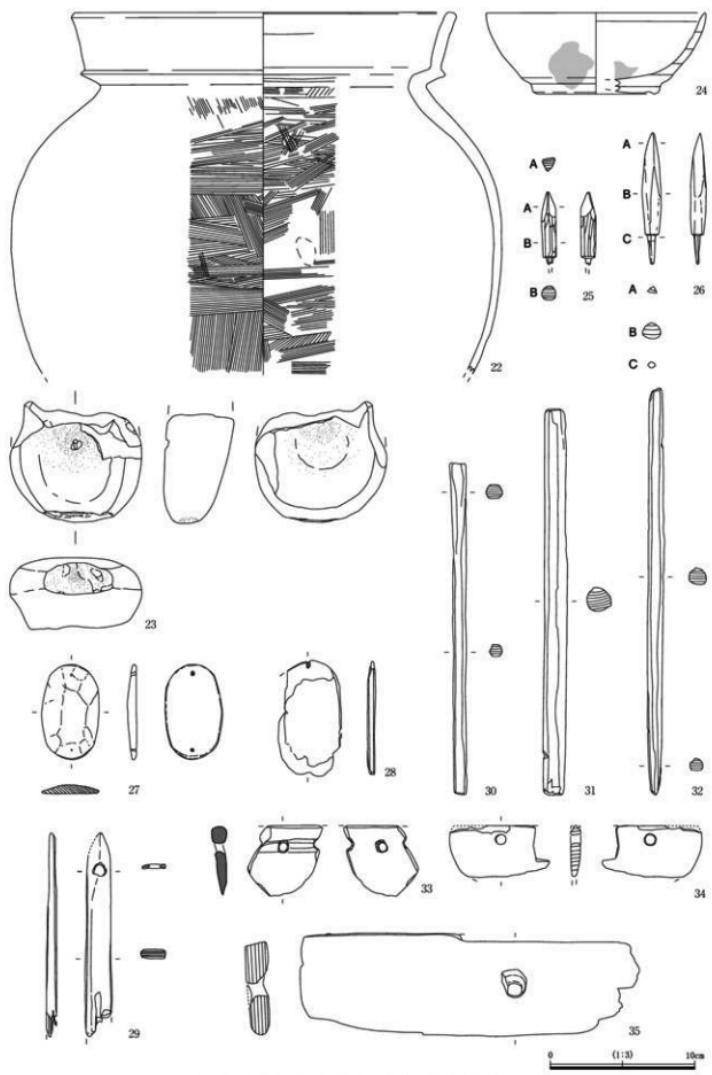
状況は、江戸時代から弥生時代後期まではほぼ安定的に包含しており、特に第12～15層では弥生時代後期末から古墳時代前期初頭を中心とする土器、木製品が多量に出土した。

出土遺物は、調査面積に比して多量で、限定的な調査期間の制約下であることから、抽出した各遺物について概観的な報告をしてその責としたい。

出土遺物[第35～38図 図版19～26]

抽出した出土遺物は、第7層から下位で出土しているものである。

土器類：(1・2・4～9)は弥生時代後期末の壺で、(1)は頸部以下を欠損し、外面に煮沸時と思われる炭化物が多量に付着する。口縁端部はつまんで丸くおさめ、屈曲部の稜は下方へ突出し、頸部までの器形では肩が張らないで底部へ至ると思われる。口縁部外面は、5条の櫛描平行沈線が施されている。口縁部内面はナデを施し、頸部にはケズリが認められる。(2・5)はほぼ直立する複合口縁を基調とした壺で、いずれも頸部から下位を欠損している。(2)は口縁端部に平坦面をつくり、屈曲部の稜はやや突出して内側に肥厚する。口縁部外面から肩部かけて左から右へのハケメ調整を施す。内面は口縁部から肩部にナデ、肩部にケズリ調整を施す。(5)は口縁部端部をつまんで丸くおさめ、屈曲部の稜はやや下方へ突出している。口縁部外面に波高の低い6条の櫛描波状文を3段に施した後、波高の高い櫛描波状文を施し、屈曲部の稜に右から左へ0.7cm間隔で垂下する斜行の押し当て痕を施す。内面は口縁部から頸部にナデ、肩部にケズリ調整を施す。(4・7～9)は逆「ハ」の字に外反する複合口縁の壺で、(4)を除き外面に煮沸時と思われる炭化物が付着しており、いずれも肩部から下位を欠損している。口縁端部をつまんで丸くおさめ、屈曲部の稜はやや下方に突出している。(4)は口縁部外面に櫛描平行沈線、頸部から肩部にかけて左から右へのハケメ調整を施す。口縁部内面から頸部にかけてハケメを調整の後にミガキを施し、肩部にはケズリ痕が見られる。(7)は屈曲部の稜をつまみ出した際の指頭痕が残り、口縁部の外面から頸部にかけてハケメ調整後、口縁部に5条の櫛描波状文が施されており、一部にミガキも認められる。口縁部の内面から頸部にかけてハケメ調整後に軽くミガキを施し、肩部にはケズリ痕が見られる。(8)は外面にナデ調整後、口縁部に4条の櫛描波状文を2段に巡らせ、肩部には縱方向へのハケメ調整を施す。内面は、口縁部から頸部にかけてナデ調整後に丁寧なミガキを施し、肩部にはケズリ痕が認められる。(9)は口縁部外面に多条櫛描平行沈線、内面は頸部までミガキを施す。外面肩部は、刻みの付いたヘラ状工具を斜行に押し当て右方向へ引き上げる押引文が巡る。(3・6・17・22)は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に北定される土器である。(3)は頸部が大きく外反し、口縁部は内傾して短く立ち上がる複合口縁の壺で、胴部から下位を欠損する。口縁部端部をつまんで丸く肥厚させ、屈曲部の稜はやや下方へ突出している。口縁部外面はヨコナデ、頸部から胴部の外面にハケメ調整、内面にケズリとナデを施す。(14・17・22)は複合口縁の壺で、球形の体部から逆「ハ」の字に大きく外反する頸部からやや外反して立ち上がる口縁部をもつ。(14)は薄厚で内外面ともに炭化物が付着し、口縁部は内外面共にヨコナデ、端部はナデを施して平坦面をつくる。屈曲部の稜は、水平に突出して頸部外面にハケメ調整、内面は指押さえの後ケズリを施す。(17・22)は口縁端部をつまんで丸くおさめ、屈曲部の稜はやや突出して内側に肥厚させている。口縁部から頸部にかけてハケメ調整後ナデを施す。胴部外面はカキメ、内面はケズリ後にナデを施している。過去の青谷上寺地遺跡の調査でも数点の出土例が報告されているが外来系の土器と思われる壺で、畿内第V様式系に相当するものと思われる。(11)は全体の器形は分からぬが壺の肩で、外面に櫛状のヘラを右傾斜させて連續刺突を繰り返す押引き文を配列し、後にミガキを施す。内面は不規則なヘラケズリ、外面に炭化物が厚く付着する。共伴する遺物等から古墳時代前期初頭の所産と思われ

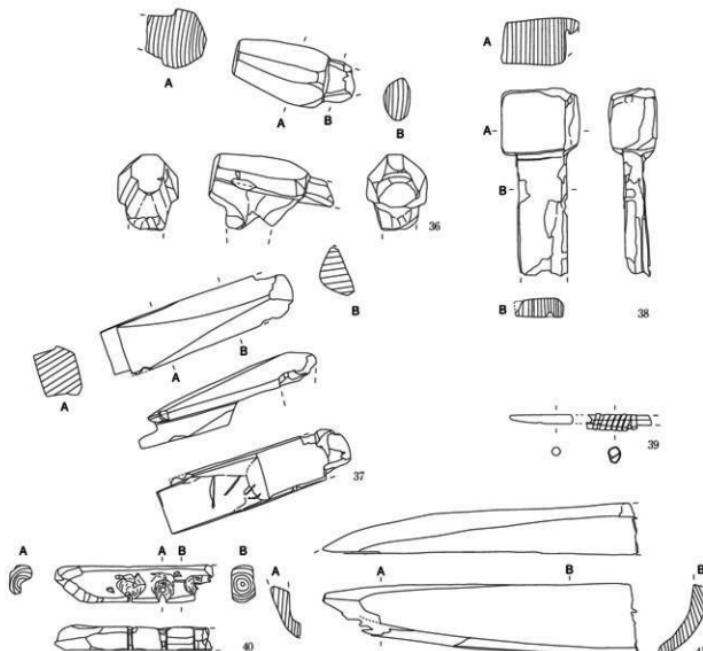


第36図 青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(2)

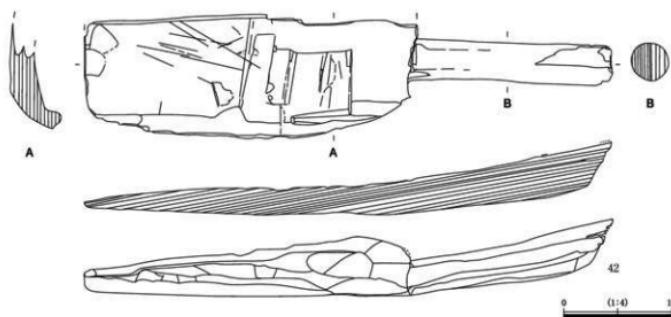
る。(12・13)は胎土、焼成状況等の差異から同一個体になり得ないものであるが、押し引き文等の手法から(12)の下位を補う特徴を持つものが(13)と考えられる壺である。(12)は「ハ」の字に内傾する大型の複合口縁を基調とする壺で、頸部から下位を欠損している。口縁端部をつまんで丸くおさめ、屈曲部の稜は水平方向に突出している。口縁端部から頸部まで内外面共にヨコナデを施し、口縁外面の上面と下面に4条の沈線文を巡らせ、上端部から沈線文に一部を重ねて右開きの半截竹簡文が巡り、下端部から沈線文に一部を重ねて左開きの半截竹簡文を巡らせている。更に上下の沈線文間の中心から右上斜方向、右下斜方向へと施工具による連続押し引き文を繰り返す手法の施文が巡る。(13)は口縁部と体部欠損する壺で、頸部から大きく外反して立ち上がり、肩部は大きく開く。頸部中央に櫛状工具による3条の平行沈線を巡らせ、この沈線を介して板状工具による右斜上方と右斜下方への押し引き文を連続させることで綾文状に巡らせる。頸部内面は綫方向へのナデ調整、肩部は左方向へのケズリ後ナデを施している。古墳時代前期に比定されるものと思われるが、器形、胎土等は異質のものであり、他地方からの外来品と考えられる。(15)は「ハ」の字状に外反する低脚高杯の脚部である。内外面共にヨコナデを施し、脚部内面に「V」字状のヘラ記号が認められ、形状から古墳時代前期の所産と思われる。(16)は口縁部を欠損する鼓形器である。受部はやや内湾ぎみに開き、脚部は外反ぎみに開き、端部をつまんで折り曲げ、接合部の稜は鋭くつまみ出している。受部、脚部共外面にケズリ後ヨコナデを施す。内面は、器受部にナデ後ミガキを施し、脚部は左方向へのケズリ調整で、端部にナデを施している。器形と調整から古墳時代前期と思われる。(18~21)は、弥生時代の包含層である第15層で検出された有孔土玉である。径は2.2~3.1cm、環の直径は2.0~3.2cm、環の径は0.6~0.7cmで整形時の指頭痕とケズリが見られ、後述の木製品(39)のような細枝を加工した環状製品が通されていたものと思われる。

石器類：(23)は、弥生時代の包含層から検出された安山岩で、敲面と磨面を持つものである。敲打痕が3面に認められ、磨面は全周縁部に及ぶ。これは礫を回転させることで対象物を敲き、潰した時に生じたと考えられる敲打痕の凹みと、磨り潰を繰り返すことによる平滑な摩耗痕である。

木製品類：(24)は高台の付く中世の木製椀で、カツラを材とする丁寧な彫りで、一部に朱色の漆塗りの痕跡が認められる。口径15.2cm、器高5.6cmを測り、高台は低いが「ハ」字に開き、杯部は丸みのある椀である。(25・26)は弥生時代後期の包含層で検出されたもので、材をイスマキで端部を鉋く尖らした三棱鎌である。(25)は茎部端部を欠損しており、残存全長5.0cm、鎌身幅1.0cm、茎径幅0.4cmを測る。(26)は全長9.1cm、鎌身幅1.3cm、茎径幅0.5cmを測る。(27・28)は弥生時代後期の包含層で検出されたもので、扁平でスギを材とする小判形の両端部に紐を通しの紐孔が穿たれた浮子と思われる。(27)は長さ5.5cm、幅3.9cm、厚さ0.6cmで、両端部に0.1~0.2cmの穿孔が空き、表面は丁寧に面取りを施すが、裏面は外縁部に加工痕が残る。(28)は長さ8.0cm、幅4.3cm、厚さ0.5cmで、両端部の穿孔は通されていた紐を双方向へ強く引いた時のように裂けているが、表面は丁寧に面取りを施し、裏面は外縁部に加工痕が残る。(29)は弥生時代後期の包含層で検出されたもので、スギを材とする漁撈具の網針で、先端部を鋭角的に尖らせ、先端部から2.7cmの所に紐を通す貫通孔が穿かれている。残存長14.0cm、幅1.7cm、厚さ0.3~0.6cmで先端部は薄厚になっている。(30~32)は腹式ヤスの形状に類似するが、材はいずれもスギで、いずれも端部を欠損している。(30)は残存長22.8cm、最大径1.2cmを測り、断面は円形である。(31)は残存長26.6cm、最大径は1.6cmを測り、断面は円形である。(32)は端部が先細りになっているが、それでも先端部は欠損していると思われる。残存長28.0cm、最大径1.2cmを測り、断面は円形である。(33~35)は、弥生時代後期末~古墳時代前期初頭の遺物包含層から検出されたもので、稻作等の収穫時に欠くことのできない穂摘具である。(33)は材がクワ属で背の側刃が一部に突出しており、背側の近い所に3孔の紐孔を穿ち、径は0.6cm、これを繋ぐ溝が彫られている。刃部の使用頻度は高いと思われ、斜めにすり減った刃縁を削り直していると思われる。残存長は5.2cm、幅4.9cm、背側の側刃部は厚さ1.0cmを測る。(34)は材がクワ属で、背の側刃が突出しており、背側の近い所に0.7cmの紐孔が穿たれている。刃部は摩耗が著し

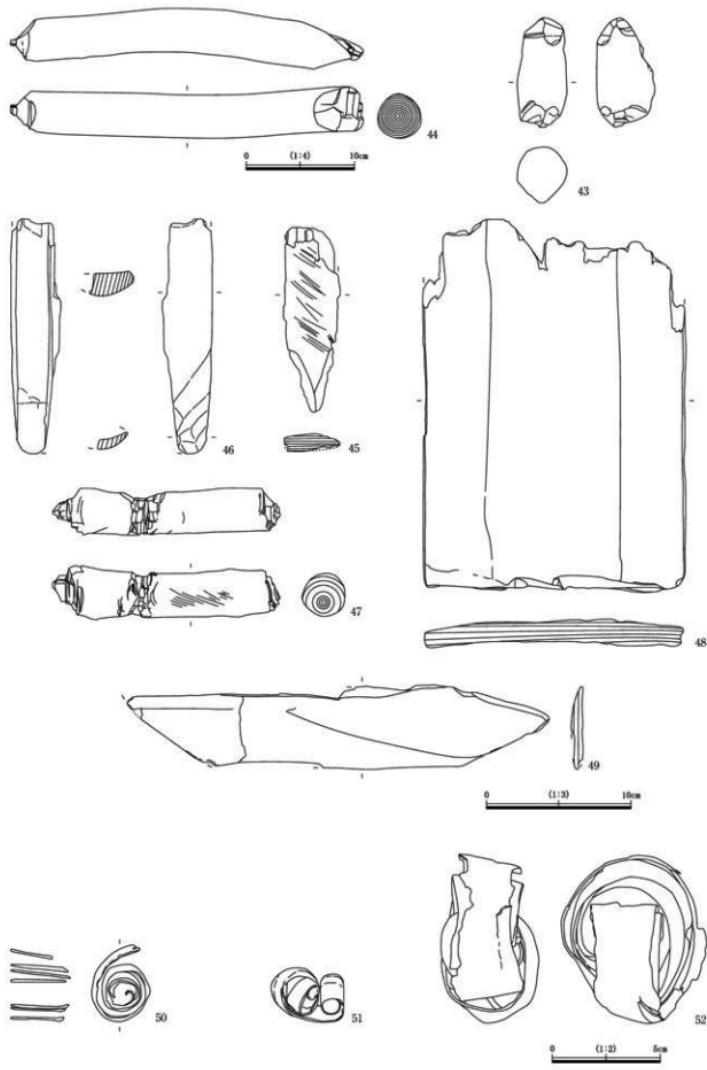


0 (1:3) 10cm



第37図 青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(3)

いことから使用頻度の高さを示している。残存長6.4cm、幅3.5cm背側の側辺部は厚さ0.7cmを測る。(35)は材がスギで、背の側刃が突出しており、ほぼ中央に1.0cmの紐孔が穿たれている。刃部は摩耗が著しいことから使用頻度の高さを示している。残存長は23.4cm、幅7.0cm、背側の側辺部厚1.6cmを測る。(36・37)は共に握り部を欠損する斧の膝柄で、弥生時代後期末の遺物包含層から検出されたもので、加工の形態は異なるが、面取り等の状況から完成品であると思われる。(36)は着装部と握り部を欠損する横斧の膝柄で斧台に着装部を削り出しており、袋状鉄斧の柄と思われる。斧台の残存長は8.6cm、着装部の残存長2.2cm、着装部の最大幅2.9cm、斧台の最大幅4.1cm、基端部3.0cm最大径は1.8cmを測る。横斧に相当するもので、装饰的要素も加えて丁寧な面取りが各所に施されている。(37)は握り部を欠損する横斧の膝柄で斧台に着装部を削り込んでおり板状の斧身を装着した横膝の柄と思われる。斧台の長さは13.5cm、着装面の長さ1.5cm、着装部の最大幅3.3cm、斧台の最大幅3.7cm、基端部3.5cm最大径は3.2cmを測る。横斧に相当するもので、装饰的要素も加えて丁寧な面取りが各所に施されている。(38)はスギを材とする建築部材の「栓」と思われ、方形の有頭部は長さ4.2cm、幅4.4cm、厚さ3.0cmで、身の幅3.3cm、厚さ1.7cmを測る。有頭を打撃することで身を柱等の脚孔に差し込んで木組みを構成するものであるが、身の基部から8.5cmを残して欠損しており、差し込んだ栓が抜けないように別材打ち込む穿孔部は欠損部に残ると思われる。共伴する遺物等から古墳時代前期初頭の所産と思われる。(39)は細枝を加工して有孔土玉(前述18・19・20・21)のような孔に通し、細い枝の両端部を更に細く削り重ね併せて樹皮で緊縛することで環状にした緊縛部の残欠と思われるもので、細い枝、樹皮とともにムラサキシキブを材としている。残存する細い枝の径0.7cmで緊縛部は3.0cmを測り、共伴する遺物等から弥生時代後期末の所産と思われる。(40)は火鑽臼の残欠で3ヶ所の火鑽孔を残して欠損している。サルナシを材とし、木取りは樹芯が用いられ、残存長10.9、幅2.6cm、厚さ1.6cmで、板の縁に径1.3~1.4cmの火鑽孔が3ヶ所残る。最も深い火鑽孔は0.7cmに達しており、共伴する遺物から古墳時代前期の所産と思われる。(41)は断面形が湾曲し先細りしており、内外面共に丁寧にミガキを施すスギ材であるが、両端部と右端部を欠損しており、用途は不明で、残存長21.6cm、残存最大幅5.0cmを測り、共伴する遺物等から古墳時代前期初頭の所産と思われる。(42)は材をスギとするアカトリで、共伴する遺物等から古墳時代前期初頭の所産と思われる。身は外底面が延長して柄部となり、身の上端面と柄部との間に段差があったと思われるが、欠損して段差がなくなっている。身の彫りは粗雑で加工痕が明瞭に残るが、柄部は丁寧にミガキを施されており、身の先端部に使用痕と思われる摩耗が見られることから完成品と思われる。全長48.7cm、身の長さ30.2cm、柄部の長さ18.5cmの構成で、身の幅約9~11.5cm、厚さは端部で0.5cm、基部で3.0cmを測り、柄部は最小径3.5cm、最大径が3.7cmで断面はほぼ円形である。(43・44)は自然木の両端部を粗雑に切断したもので、後述の木製垂(47)を意識した加工途上の可能性もあるが、現段階での用途は不明で、切断面に残るノミ痕から鋭利な刃物が使用されており、共伴遺物から弥生時代後期末~古墳時代前期初頭に比定される。(43)は長さ7.5cm、幅3.0~4.0cmで、モチノキを材としている。(44)は長さ40.6cm、幅4.8~5.0cmで、イヌマキを材としている。(45・46)杉材の先端部を尖らした用途不明の加工材で、共伴遺物から古墳時代前期初頭の所産である。(45)は長さ12.8cm、幅3.9cm、厚さ1.0cmの板状先端部に長さ4.0cmを尖らせており、ノミ痕が粗雑に残ることから未完成品と思われる。(46)は長さ16.2cm、最大幅3.4cm、厚さ1.5cmの板状先端部に長さ7.2cmを尖らせてヘラ状に加工しているが用途は不明である。(47)は自然木の両端部を粗雑に切断し、端部から0.6cmに切り込み状を巡らせた木製垂と思われる。共伴遺物から古墳時代前期初頭の所産と推定されるもので、全長15.3cm、幅3.0cmで、端部から6.0cmの所に幅約2.0cm、深さ約0.5cmの切り込みを入れている。加工痕が粗雑であることから未製品と思われる。(48)はスギの板材で共伴遺物から古墳時代前期初頭の所産と推定されるもので、上端部を欠損している。残存長26.4cm、幅18.0cm、厚さ1.2~1.7mmを測るが、用途は不明である。(49)は端部を尖らせ、片端部を斜方に切断したスギの板材である。全長29.1cm、幅5.8cm、厚さ0.8cmで、加工途上の未完成品と思われ、現形状から造形的なものを



第38図 青谷上寺地遺跡 出土遺物実測図(4)

意識しているものと考えられる。共伴する遺物から古墳時代前期初頭の所産と推定される。(50~52)は共伴遺物から弥生時代後期末~古墳時代前期初頭に比定されるサクラの樹皮で、原本から一定の幅を決めて樹皮を剥がした後に巻き上げたもので、樹皮の性格上巻き上げた形態は様々であるが多量に出土しており、備蓄して置くことで加工品の緊縛等に活用した可能性もある。

小結

今回の調査では、層位的に耕作土の上面から順に16層に分層され、約0.4m掘り下げた第4層中では江戸時代の遺物が検出された。約0.8m掘り下げた第8層で中世の土器片を検出した。約1.0m掘り下げた第9層で古墳時代の土器片と多量の木器類を検出した。約1.4m掘り下げて砂を含んだ第12層では古墳時代前期に位置付けられる多量の土器片、木製品、魚骨等を検出した。約1.8m掘り下げ、砂を含んだ第13~第15層で弥生時代後期に位置付けられる多量の土器片、木製品等が検出された。これらの遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期を主体とする多量の遺物で、人の直接的な當みを裏付けるような遺構の検出はされなかったが、弥生時代後期から古墳時代前期を主体とする多量の遺物が検出された。特に低湿地遺跡特有で遺存状態の良好な木製品は、生産活動と加工技術の高さを示し、製品毎に多種多様な樹種が用いられており、用途に適した加工を熟知していたようである。海浜部に所在する遺跡の産物である魚貝類の遺存体も多種多様で、検出状況から豊富な食材に恵まれていたことを裏付けており、検出の成果は第3章にまとめられている。特異な動物遺存体としては、ウマの臼歯も出土しており、同定の成果は第3章にまとめられている。また、在地に見慣れない外来系の土器は遠隔地との交易交流を裏付けるものとして注視されるものである。

指定地内で実施されている年次的な発掘調査との層位的な差異、遺物の出土状況等の整合性を追求することも課題としては残る。調査当初では、今回の調査地が青谷上寺地遺跡の範囲から外れていることで、弥生時代の人々の生活拠点から外れているものと想定され、遺跡の中心部との比高差にも差異が認められることから水辺に位置することも考えられた。しかし、汽水湖の水辺に見られるマコモ類、漂着物、塩分が染み出して海に近いことを示すような様相は認められなかったことから、溝沼又は海辺の汀線は更に北側に位置するものと考えられる。従って、遺跡の中心部と推定されている地区との比高差、土層から見た地形の推移も北方向に向けて徐々に下降していることから、古環境下でも水辺に位置してはいないものの、そう遠くない位置に所在しているものと思われる。

今回の発掘調査では、遺跡の指定地から外れた地区的現況を把握する基礎資料として保存、保護に向けての一助になるものと思われる。

最後に調査にあたっては、排水機器の電力供給設備の設置、電力提供をいただいた鳥取南海紡績株式会社、動物遺存体の同定をいただいた金沢大学覺張隆史氏、岡山理科大学富岡直人氏、江川達也氏、大越司氏、木製品の同定をいただいた鳥取大学中原計氏他多くの方にご支援、ご援助をいただいた記して感謝を申し上げて小結とする。

参考文献

- 財團法人 鳥取県教育文化財団(2001)鳥取県教育文化財団調査報告書72
財團法人 鳥取県教育文化財団(2002)鳥取県教育文化財団調査報告書74

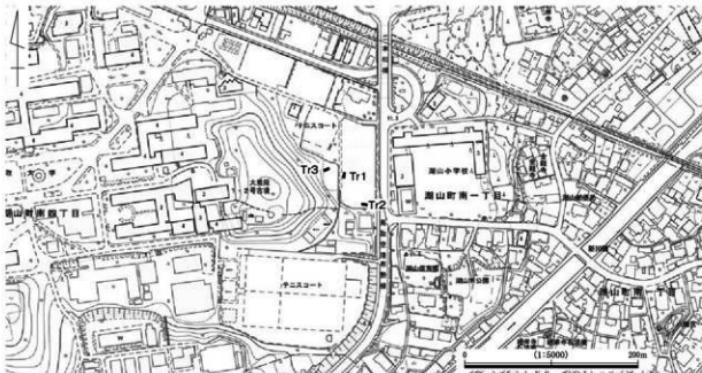
- 青谷上寺地遺跡3
青谷上寺地遺跡4

第5節 湖山所在遺跡

湖山所在遺跡は、鳥取市湖山町南4丁目101番地の広大な鳥取大学のキャンパス内に位置し、鳥取空港布勢線に接して所在するが、近年まで同大学の木造宿舎が営まれていた。

当該地は、北の日本海から内陸へ約2km入った標高約10mの砂丘の後背地で、西には濃山台地と呼ばれる標高25m程度の微高地にこの地方では大型の前方後円墳である大熊段1号墳、三浦1号墳、円墳の大熊段2号墳、大熊段遺跡、南の湖山池潮岸には湖山第1・2遺跡が展開している。

今回の発掘調査は、前述の旧大学宿舎跡地に対する遺跡の範囲確認を行うもので、既に宿舎は取り壊されて更地状態となっており、用地のほぼ中心部に一ヶ所、南の湖山第1遺跡方向に一ヶ所、市史跡指定の大熊段1・2号墳が所在する微高地の直下に一ヶ所のトレンチを設定し、構造、遺物の有無等を確認した。



第39図 湖山所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr 1)【第40図 図版12】

第1トレンチは、旧木造宿舎の跡地のはば中央に30×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下約1.7mまで垂直に掘り下げ、特にトレンチ東側の一部を10~40cm深く掘り下げて土層の堆積状況を確認した。

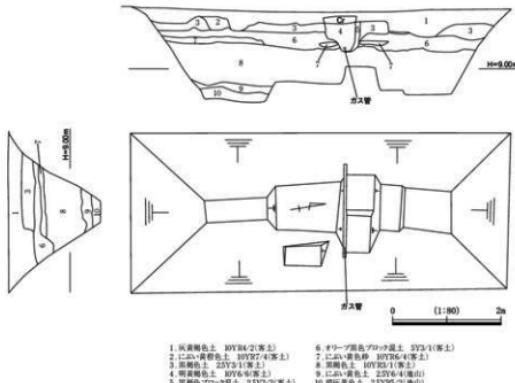
土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚10~50cmで灰黄褐色の客土で宿舎を更地にする際の造成土と思われる。第2層は、丘陵肩部に堆積する層厚約25cmのにぶい黄橙色土にブロックが混入した客土である。第3層は、層厚10~30cmの黒褐色土で一部にロームブロックが混入する客土である。第4層は、層厚約50cmで明黄褐色の真砂土の客土で層中に都市ガスの配管が埋設されていた。第5層は、層厚約50cmの黒褐色ブロック混土でガス管理設時の客土である。第6層は、層厚20~35cmでオリーブ黒色ブロック混土の客土である。第7層は、第6層中層に認められるにぶい黄色砂の客土である。

第8層は、層厚約90cmの黒褐色土で層中に現代の生活用品等が多量に混在する客土である。第9層は、層厚5~20cmのにぶい黄色土の地山で、上層からの沈着が認められる。第10層は、暗灰黄色の地山である。

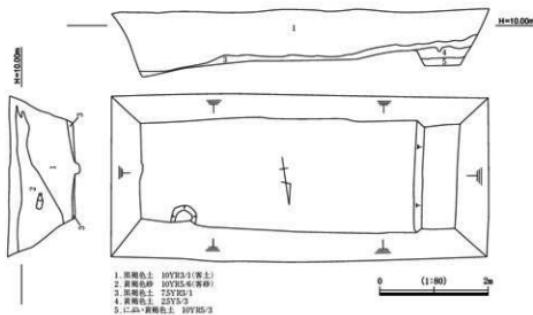
第9層の地山の上面まで造成土と客土が多量に施されており、構造、遺物共に検出されなかった。

第2トレンチ(Tr 2)【第41図 図版12・13】

第2トレンチは、敷地の南端で、湖山第1遺跡に近く鳥取空港布勢線の近接地に30×7.0mの東西ト



第40図 湖山所在遺跡 第1トレーナー実測図



第41図 湖山所在遺跡 第2トレーナー実測図

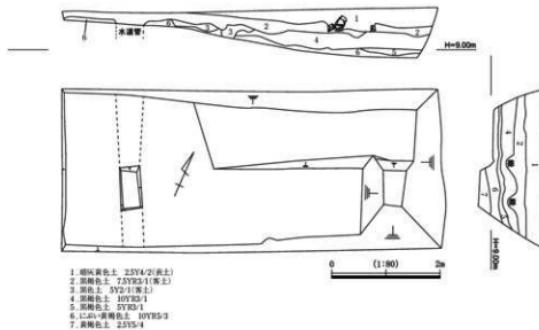
レンチを設定した。調査では、地表下約1.2mまで掘り下げ、特にトレーナーの西側を約30cm深く掘り下げて垂直的に調査を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚110cmでビール瓶等の現代遺物が混在する黒褐色の客土である。第2層は、第1層中の間層で、黄褐色の浜砂中に瓶類の現代遺物が多量に混在する客土である。第3層は、地山の上面に薄く施された黒褐色の客土で現代の生活用品が混在する。第4層は、黄褐色の地山で、上層からの沈着が認められ、トレーナー東側で地山の掘りこみが見られたがビニール片が貼り付いていたことから現代のものと思われる。第5層はにぶい黄褐色の地山である。

第4層の地山の上面まで客土が多量に施されており、遺構、遺物共に検出されなかった。

第3トレーナー(Tr 3)(第42図 図版13)

第3トレーナーは、敷地内の西端で大熊段1号墳が所在する微高地の麓に3.0×7.0mの東西トレーナーを



第42図 湖山所在遺跡 第3トレンチ実測図

設定した。調査では、地表下約0.9mまで掘り下げ、特にトレンチの東側を約30cm深く掘り下げて垂直的に調査を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層がトレンチの中程から東側へ微高地の緩やかな傾斜に沿って施された暗灰黄色の造成土で、東端部では層厚35cmを測る。第2層は、層厚10~20cmの黒褐色土で第1層の造成前に表土面であったものと思われ層中には現代遺物が混在するまた、第2層を掘り込んで水道管の埋設が確認されており、複数条に分岐された埋設も確認され、第3層は埋設時の堀上土である。第4層は、トレンチのはば中央から東側に堆積した層厚約20cmの黒褐色土で東側では轍による陥没面が認められる。第5層は、地表面に薄く堆積した黒褐色土で上層からの沈着が見られる。第6層は、にじむ黄褐色の地山で上層からの沈着が見られる。第7層は、黄褐色の地山である。

遺構、遺物共に検出されなかった。

小結

今回の調査は、鳥取大学のキャンパス地内旧木造宿舎の跡地に対する、遺構、遺物等の遺存状況を確認することが目的で、当該地内の三ヶ所で試掘調査を実施した。その結果、いずれの調査トレンチでも近年まで営まれていた同大の宿舎跡地に関連する大規模な擾乱が認められ、遺構、遺物共に検出されなかった。

参考文献

- (財)鳥取県教育文化財团(1986)鳥取市 大熊段遺跡
鳥取県教育委員会・(財)鳥取県教育文化財团(1989)鳥取市 湖山第1 遺跡

第6節 短尾遺跡

鳥取市気高町浜村字北短尾に所在する短尾遺跡は、日本海沿岸に発達した砂丘地内で標高約30m程度の小高い独立峰のような小山の丘陵上に所在しており、当該遺跡と日本海との狭間に一般国道9号が延びている。

遺跡の調査歴は、昭和55年に実施された国道9号の4車線化へ拡幅改工工事する際に一部が切り土される事になり、丘陵上に所在する墳丘状の高まり3基が調査の対象として発掘調査が実施されている。

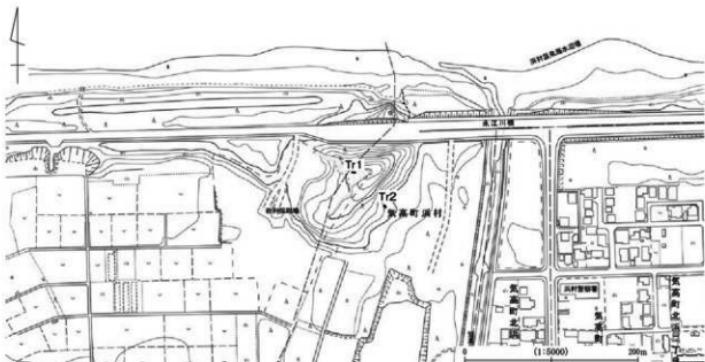
その結果、最高所に築造されている墳丘では、 6×7 m椿円を呈し基底部から頂部の高さは1.5mを測り、人頭大の割石が環状に巡る遺構を検出している。環状列石中のやや北より検出された石英安山岩の下からは地山を掘り込んだ径30cm、深さ20cmの円形土坑が検出され、土坑の壁には粘土が貼られていることも確認されている。

東側に位置する墳丘は、径4mのほぼ円形を呈し、基底部から頂部の高さは2.0mを測り、人頭大の割石が環状に巡る遺構を検出している。環状に巡る列石の中程で地山の斜面を掘り込んだ長径2.1m × 短径1.6m、深さ30cm程度の土坑が検出されている。

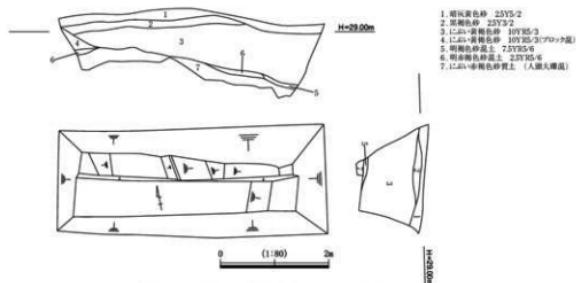
最も北側に位置する墳丘では、径3.5mのほぼ円形を呈し、基底部から頂部の高さは0.8mを測り、人頭大の割石が環状に巡る遺構を検出している。環状に巡る列石の中で地山の斜面を掘り込んだ長径1.1m、深さ30cm程度の土坑が検出されている。

この発掘調査では、埋葬施設はなく墳丘状の高まりは古墳ではなく、「塚」であることが確認されており、地山面で環状に巡る積み石とその中心部で蓋石に閉塞された土坑を検出し、特徴的なものはなかったと報告されている。出土遺物は、墳丘状の底部で時期不明の土師器、盛り土中から「康熙通宝」、「寛永通宝」の出土が報告されている。

今回の発掘調査は、丘陵の南側直下で稼働している太陽光発電施設の拡幅計画に伴うもので、国道の拡幅工事による切り土後に残ったいわゆる残地的な形状を留める丘陵頂部と丘陵の東側裾部に各一ヶ所の調査トレンチを設定し、遺構、遺物の有無等を確認した。



第43図 短尾遺跡 調査トレンチ位置図



第44図 短尾遺跡 第1トレンチ実測図



第45図 短尾遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図

第1トレンチ(Tr 1) [第44図 図版13・14]

調査トレンチは、狭く半月状に残る丘陵頂部に20×50mの東西トレンチを設定し、地表下約1.3mの地山面まで掘り下げて垂直的に調査を行い、特にトレンチ北側の地山面の一部を深く掘り下げた。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚5~20cmで新砂丘の砂が堆積した暗灰黄色砂の表土である。第2層は、層厚10~15cmの黒褐色砂で昭和55年の前発掘調査で検出された環状に巡る砾石の上面を覆っていた層と考えられる。第3層は、層厚35~90cmのにぶい黄褐色砂で、前調査遺構面に堆積していた層と符合するが、二次的なものと思われる弥生土器片1点を検出した。第4層は、トレンチ西側の一部に見られ、傾斜面に第2・3層が被さる層厚約50cmで小ブロックを含むにぶい黄褐色砂である。第5層は、トレンチ西側と東側の一部に見られる層厚約10cmの明褐色砂混土である。第6層は、地山面に薄く堆積した層厚約10cmの明赤褐色砂混土で、層中から細片で時期を特定できない須恵器片3点を検出した。第7層は人頭大の礫を多く含むにぶい赤褐色の粘質土の地山で、この海岸線一帯に見られる白兎円礫層と呼ばれるものである。

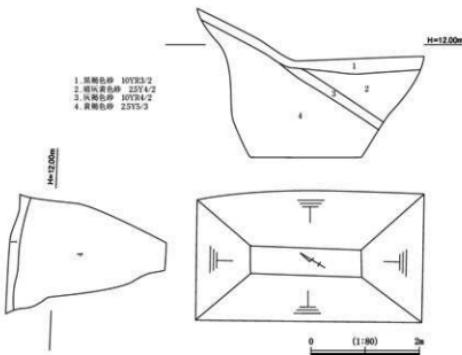
出土遺物 [第45図 図版26]

出土遺物は、第3層で検出された弥生土器片(1)と第6層で検出された須恵器片(2~4)である。

(1)は、出土地の海浜部特有の環境も影響して著しく摩耗している弥生時代後期の器台で、口縁部から体部にかけての一部である。受け部は外反し、端部で更に外反して行き、稜は鋭角的に突出する。口縁部内面はケズリの後ナデを施し、外面はナデの後突出部から上面へ左方向のハケメが認められるが、詳細な調整不明である。(2~4)は、叩き目文が見られる須恵器で小片であることから器形、時期等の特定には至らなかった。

第2トレンチ(Tr 2) [第46図 図版14]

調査トレンチは、丘陵東側の裾で、更に東側に向けて小谷地形になっており、小谷地形の縁に相当す



第46図 短尾遺跡 第2トレンチ実測図

るテラス状地に $2.5 \times 4.0\text{m}$ の東西トレンチを設定し、地表下約 2.9m まで掘り下げて垂直的に調査を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚約 20cm で黒褐色砂表土である。第2層は、層厚約 90cm の暗灰黄色砂である。第3層は、層厚約 20cm の灰黄褐色砂である。第4層は、層厚 2.5m 以上の黄褐色砂であった。

遺構、遺物は検出されなかった。

小結

今回の調査地は、昭和55年に実施された発掘調査の後に削平された残地に遺構面等が所在しているか、否か。又、丘陵周辺で掘削の及んでいないところに遺構等が遺存していないかを確認する調査であった。

狭く半月状に残された丘陵頂部へ設定した第1トレンチでは、前調査で検出されたような石列と石積み遺構は検出されなかつたが、前調査の遺構面からの広がりと推定される第3層を確認することができた。また、厚く堆積した砂層中から弥生土器片1点を検出したが、二次的に堆積した砂層中の検出であったことから後後に混入したものと判断された。従って第1トレンチでは、遺構、遺物包含層等は遺存していないと判断された。

丘陵東の裾に設定した第2トレンチでは、丘陵を厚く覆っていた砂に新たな砂が堆積する繰り返しが見られ、後に腐植土等が堆積して現在に至っている様相が見られた。これらの砂層はいずれも無遺物層で、約 2.9m まで掘り下げたが、崩落の危険と手堀での限界と判断し、更なる下層への掘り下げは断念することになった。

日本海に面する砂丘の堆積は、季節風に伴う飛砂によって一夜で地形を変貌させるほど激しい堆積と移動を繰り返しており、短尾の丘陵裾でも新砂丘の堆積と移動によって厚い砂層が形成されていると思われる。従って、第2トレンチに相当する砂丘地の掘り下げについては、重機等による事前の掘り下げ後に手堀の調査を行う事も配慮すべきであろう。

参考文献

気高町教育委員会(1981)北短尾遺跡発掘調査報告書

第7節 松原所在遺跡

調査対象地は鳥取市松原地内に所在し、JR鳥取駅の西約8km弱、潟湖である湖山池南西岸から500m程南に入った吉岡平野の東側丘陵裾付近に位置する。吉岡平野の中央には湖山川が貫流し、調査地の南西約800mには古くから湯治場として開けた吉岡温泉街が形成されている。

調査地近辺の遺跡としては、前面に形成された西側平野部に松原田中遺跡が展開する。縄文時代晚期～中世前半の遺構・遺物が確認され、遺構の堆積状況から弥生時代中期～古墳時代前期の水田域と住居域の変遷が推察されているほか、弥生時代中期の遺物包含層や遺構埋土中から多くの玉作関連遺物が出土しており集落内の生産場所の可能性が指摘されている。また東側丘陵部に位置する松原谷田遺跡からは弥生時代後期の土壙をはじめとして古墳時代前期の堅穴住居跡やそれ以降の土壙、古代～中世の掘立柱建物等の遺構・遺物が確認されている。さらに西南西の独立丘陵上には、戦国時代にこの地域を支配した国人吉岡氏が築いたとされる丸山城が立地する。

少し周辺に目を向けると、調査地の北東約2kmで、湖山池に浮かぶ青島に青島第1～3遺跡が所在する。これらの遺跡からは縄文時代後期から弥生時代後期の土器や子持ち勾玉、有孔円盤が出土し、対岸の湧泉地に立地する塞ノ谷遺跡からも弥生時代中期から古墳時代の土器のはか分銅型土製品や木製模造品等が出土しており、両遺跡とも水に関連した祭祀的色彩を持った遺跡として知られている。また2km東の高住地内では、果樹園造成時に丘陵東側斜面から扁平紐式の流水文銅鐸が出土している。

これらの遺跡が立地する湖山池周辺の丘陵上には、弥生時代後期には桂見や西桂見、松原に墳丘墓が出現し、古墳時代に入ると弥生時代からの伝統を受け継いだ可能性が考えられる小規模な方墳も含んだ桂見、倉見、高住、良田、松原などの古墳群が形成されている。さらに調査地より南の吉岡温泉街西側丘陵には5基の前方後円墳を含む50基余りからなる吉岡古墳群が展開し、南側の吉岡大海地区の水田部からは鶴尾や單弁十二葉蓮華文軒丸瓦などが出土しており、7世紀後半頃の古代寺院が所在した可能性が指摘されている。

第1トレーンチ(Tr 1)(第48図 図版14)

調査対象地の現状は、丘陵から前面の平野部への変換点付近の地表面標高約2.6mの造成地である。鳥取西道路に隣接した高速道路交通警察隊庁舎建設が計画されており、7×3m程度のトレーンチ1ヶ所



第47図 松原所在遺跡 調査トレーンチ位置図

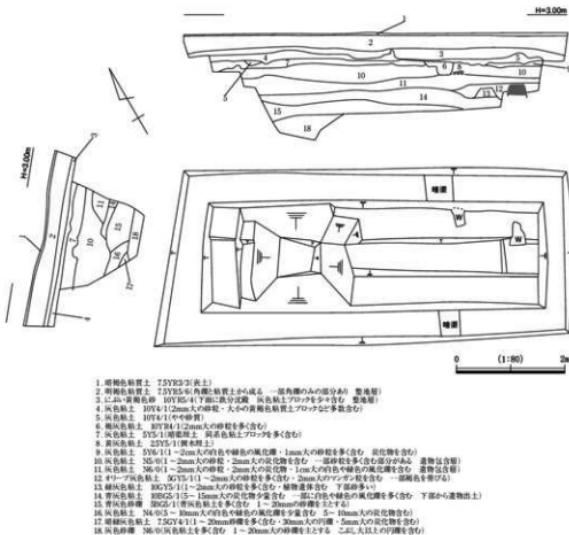


図48図 松原所在遺跡 第1トレンチ実測図

を設定し、地表面下1.9m（標高0.7m）付近まで掘下げを行った。

その結果、地表面下0.45m程度まで表土（第1層）及び現代の客土（第2・3）層が認められ、以下、1.2m（標高1.4m）付近まで粘土（第4～14）層、砂礫（15・18）層と続く。このうち客土下の灰色粘土（第4・5・7）層からは弥生土器、土師器、須恵器の細片とともにガラス片や土管片が検出され、客土以前の旧耕土とみられる。第7層上面からは南北方向にトレンチを横断する竹を使用した暗渠1条が検出されている。

標高2m強の第8層は流木に係る土層である。第9～11層は炭化物を含む灰色粘土層で、10、11層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器の細片が出土している。標高1.7m以下の第12、13層は流木や未分解植物遺体を含み、その下の第14層は少量の炭化物とともに縄文土器細片が出土している。

標高1.4m以下には砂礫（第15・18）層または風化礫や砂礫を含む粘土（第16・17）層が続き、第15層上面からは縄文土器片が出土している。

なお調査地内では、上述の暗渠以外には明瞭な遺構は検出されなかった。

小結

今回の調査地内からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器の細片が少量ながら検出されたが、いずれも磨滅しており周辺からの流入と考えられる。また明瞭な遺構も確認されなかつたが、近接の松原谷田遺跡や松原田中遺跡から集落跡や水田遺構が調査されており、今回の調査地周辺にも遺跡が遺存する可能性はいぜんとして残るものと考えられる。今後も開発等に伴ってはきめの細かい対応が必要であろう。

第8節 青島第1遺跡

青島第1遺跡は鳥取平野西端部に形成された潟湖・湖山池に浮かぶ島々の中で最大の面積を有する青島に所在する。青島は南北約700m、東西約150mと南北に細長いひょうたんの形をした島で、北側丘陵の標高は60.8mを測る。現在湖山池に浮かぶ島々の中で唯一陸地と橋でつながっており、徒歩で渡ることがができる。この青島は山陰地方で最初(大正12年)に縄文土器が発見された遺跡として知られ、青島第1～第3遺跡の3遺跡からは縄文時代～古墳時代に至る土器類や石器類が出土している。特に青島第2遺跡出土の子持勾玉は鳥取県指定有形文化財としてよく知られている。遺構については、明治～昭和初期の耕作等によって既に喪失した可能性が指摘されているが、その後のトレンチ調査では、柱穴状ピット群の残存が確認されている。

また湖山池周辺地域は古くから遺跡の密集地として知られており、分銅型土製品や木製模造品等が出土して今回調査の青島遺跡と同様の水に関連した祭祀的色彩の濃いと考えられている対岸の塞ノ谷遺跡など、これまでに多くの調査が実施されてきた。さらに近年では鳥取西道路の改築事業に伴って新たに新遺跡の発見や調査が実施されている地域である。

第1トレンチ(Tr 1)[第49図 図版15]

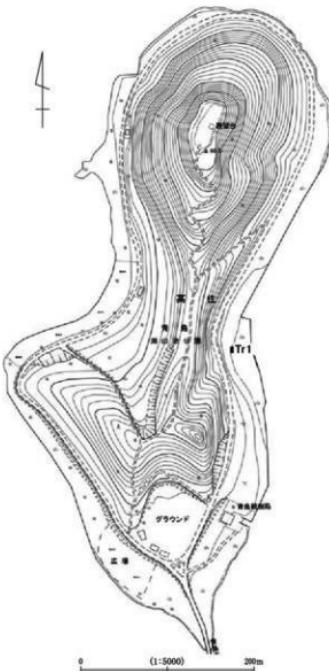
調査地は、青島の南北に連なる丘陵の鞍部東側で現在の島を外周する遊歩道よりさらに東側の湖岸となる低地に位置する。調査着手時には若干の水に浸かった状態で湿地状を呈していたが、ここにビオトープ設置が計画されている。調査は、予定地内に約 7×3 mのトレンチ1ヶ所を設定し、地表面下1m(標高0.6m)付近まで掘下げを行った。

その結果、標高1.6m強の地表面下0.1m程度の表土(第1層)下では北側1/2程度にわたって最深約0.6m程度の擾乱土(第2・3・5・6層)が認められ、第6層中からは現代のものとみられる角杭が出土している。これらに掘り込まれる標高1.5～1.1m程度の第7層も緑灰色泥岩の小礫とブロックからなる層で、客土と考えられる。その下の標高1.1m付近の厚さ2cm程度の第8層は近・現代の磁器片や瓦片を含む遺物包含層である。その下の第9層は流木や植物起因とみられる有機物を含む砂質かかった粘土層で、標高1m以下の地山とみられる明青灰色軟岩(第10層)へと続く。

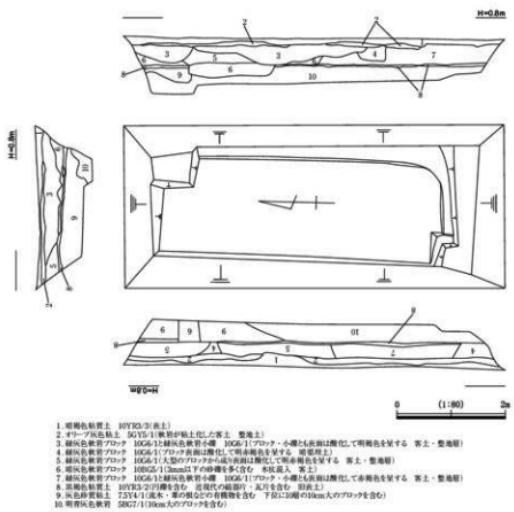
なお、第7層上面付近から竹を使用した暗渠(埋土:第4層)を検出したが、その他には明瞭な遺構は検出されなかった。

小結

今回の調査地は青島第1遺跡の北限付近にあたるが、かつての畑作や水田化工事等による遺構喪失の可能性も考えられた。調査の結果、調査地内では北側にみられる現代の搅乱土下に一部地山を削平した



第49図 青島第1遺跡 調査トレンチ位置図



第50図 青島第1遺跡 第1トレント実測図

現代の客土がなされていることが判明した。部分的には流木や有機物を含む堆積層(第9層)が認められたが、当該の遺構、遺物は検出されなかった。しかしながら昭和40年代のトレント調査でピット群が確認されていることもあり、今後も開発には注意が必要である。

第3章 自然科学分析

第1節 2016年度鳥取市青谷上寺地遺跡出土動物遺存体

富岡直人、江川達也、大越 司

1 調査の経緯

本資料は、国史跡である青谷上寺地遺跡の隣接地点(鳥取市青谷町青谷)での鳥取市による2016年5～6月の発掘資料である。もとより青谷上寺地遺跡は弥生時代の遺跡として有名で、今回発掘で調査された堆積層は、国史跡と同様、沖積平野の一部に形成された低湿地性の地層であった。

資料のうち多くの動物遺存体は富岡研究室で分析することとした。また、弥生時代の可能性がある層位からウマが出土したことから、金沢大学国際文化資源学研究センター覚張隆史に調査を依頼した。

2 資料の概要

同定された動物遺存体の分類リストを表1に示す。

表1 出土動物遺存体リスト

門	大分類		小分類		
	上綱・綱	目	科	属	種
M O L U S C A 門 軟 体 動 物 門	P e l e c 足 p o 網 d a	目科属種不明			Pelecypoda ordo. indet.
		イガイ目 Mytilida	イガイ科 Mytilidae	属種不明	
		カキ目 Ostreida			Ostreidae gen. et sp. indet.
		マルスダレガイ目 Veneroida	シジミガイ科 Cyrenidae	マカキ属 Crassostrea	
C h o r o n a 物 a 門 脊 索 動 物 門	O s t 硬 骨 魚 上 綱 h 魚 綱 s e s	目科属種不明			Osteichthyes ordo. indet.
		ボラ目 Mugiliformes	ボラ科 Mugillidae	属種不明	
		スズキ目 Perciformes	サバ科 Scombridae		
			スズキ属 Lateolabracidae	マグロ属 Thunnus	種不明
			タケノコ鰈 Sparidae	スズキ属 Lateolabrax	スズキ
		哺乳綱 MAMMALIA	ウマ目 Perissodactyla	ウマ科 Equidae	ウマ属 Equus
		ウマ Equus caballus			

a. 軟体動物門

①斧足綱

ア シジミガイ科

あ ヤマトシジミ

Tr 1の12層よりヤマトシジミのL 1点以上、R 2点以上の殻体の殻皮が出土した。なお、これらの資料は殻皮のみであったが、形態的にシジミガイ科であることは確実で、さらに貝殻形態、成長肋の形状、殻皮の光沢から汽水域に生息するヤマトシジミと同定した。

イ イガイ科

塩水に生息するイガイ科の殻皮がTr 1 の13層より1点が出土した。殻皮と殻質の一部が出土しただけであり、断定は困難であるが、大まかな形態からイガイの可能性がある。

ウ イタボガキ科

ア マガキ属

塩水～汽水に生息するマガキ属とイタボガキ科の殻体が、Tr 1 の11層より出土した。

б.脊椎動物門

① 硬骨魚綱

ア サバ科

あ マグロ属

塩水に生息するマグロ属の腹椎～尾椎の各部位がTr 1 の1から12層より29点が出土した。富岡研究室のクロマグロ標本と比較的似ているが、種の特定はできなかった。層位が特定できたものは、10層が17点、12層が7点で、それ以外は層位が特定されなかった。

イ スズキ科

あ スズキ

塩水～汽水・淡水域に生息するスズキの第1椎骨と腹椎がTr 1 の15層より出土した。この2点は大きさが明確に異なることから、別個体に由来するものと考えられた。

ウ タイ科

属・種は不明であるがタイ科の腹椎がTr 1 の15層より出土した。形態は塩水に生息するマダイの可能性が高いと考えられるが、破損箇所が多く、タイ科で同定を止めた。タイ科は塩水～汽水・淡水に生息し、これらの水域で捕獲されたものと推定される。

エ ボラ科

属・種は不明であるが、ボラ科の腹椎がTr 1 の15層より出土した。椎体の周辺が傷んでおり、種の特定は困難であったが、ボラやメナダといった塩水～汽水に生息するボラ科の可能性が考えられる。

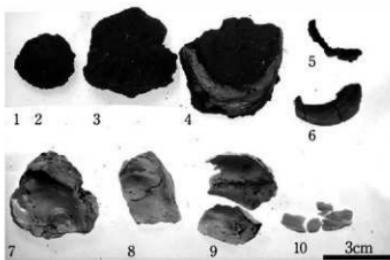
②哺乳綱

ア ウマ科

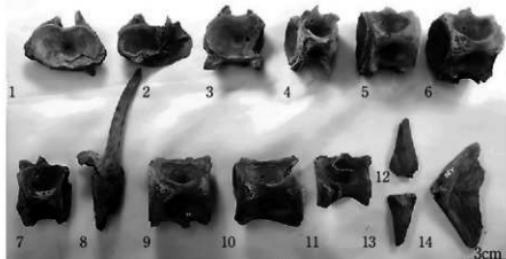
あ ウマ

ウマの臼歯が出土した。詳細は覚張氏の報告を参照されたい。

本文とレイアウトは富岡が担当し、同定・登録・作表・撮影作業は、富岡・江川達也・大越司が担当し、種名表は江川が担当した。



図版1 斧足網 Tr.1
1,2,3: ヤマトシジミ A35-1236, 4: イガイ科殻質+殻皮 A34, 5, 6: イガイ科殻皮 A41, 6: イガイ科殻質 A42-1
7: マガキ属左殻 A32-1, 8: マガキ属右殻 A32-2, 9: イタボガキ科 A32-3, 10: 斧足網目不明破片 A42-2



図版2 硬骨魚網 マグロ属 Tr.1, 10層
1, 2, 3, 4: 腹椎 A21, A25, A22, A23, 5, 6: 尾椎 A3, A4
7, 8, 9, 10, 11: 尾椎 A5, A30, A6, A20, A24, 12: 神經棘 A31, 13: 血管棘 A7, 14: 下尾骨 A2



図版3 硬骨魚網 a Tr.1, 15層, b: 現生標本
1: スズキ 第1椎骨 a: A33, 2: 腹椎 a: A37, 3: タイ科 腹椎 a: A38, 4: ボラ科 腹椎 a: A40

表2 出土動物遺存属性

整理 No.	AnNo.	枚番号	部位	取上日	遺物番号	大分類	小分類	部位名	LRM	部分	成長度	色調	備考
1	A35	1	Tr 1	12	H28.531	103	斧足網	ヤマトシジミ	殻体	L	殻皮	-	N A35-2と合せ貯
2	A35	2	Tr 1	12	H28.531	103	斧足網	ヤマトシジミ	殻体	R	殻皮	-	N A35-1と合せ貯
3	A36		Tr 1	12	H28.531	103	斧足網	ヤマトシジミ	殻体	R	殻皮	-	N
4	A34		Tr 1	13	H28.62	(カキ貝)	斧足網	イガイ科	殻体	R	殻皮	-	N Outer layer の薄造り同定
5	A41		Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	斧足網	イガイ科	殻体	?	殻皮	-	N
6	A42	1	Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	斧足網	イガイ科	殻体	?	殻質	-	W
7	A32	1	Tr 1	11(排水路)	H28.524	28	斧足網	マガキ属	殻体	L	殻質	-	N 殻頂部を含む
8	A32	2	Tr 1	11(排水路)	H28.524	28	斧足網	マガキ属	殻体	R	殻質	-	N 殻頂部を含む
9	A32	3	Tr 1	11(排水路)	H28.524	28	斧足網	イクボガギ科	殻体	?	殻質	-	N 礫片
10	A42	2	Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	斧足網	貝不明	殻体	?	殻質	-	N
11	A21		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	腹椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
12	A22		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	腹椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
13	A23		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	腹椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
14	A24		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	腹椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
15	A25		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	腹椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
16	A3		Tr 1	10	H28.520	14	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.14(骨)
17	A4		Tr 1	10	H28.520	14	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.14(骨)
18	A5		Tr 1	10	H28.520	14	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.14(骨)
19	A6		Tr 1	10	H28.520	14	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.14(骨)
21	A8		Tr 1	12(壁面)(東)	H28.67	84	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.84(骨)
22	A9		Tr 1	12(壁面)(東)	H28.67	84	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.84(骨)
23	A10		Tr 1	12(壁面)(東)	H28.67	84	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.84(骨)
24	A11		Tr 1	12(壁面)(東)	H28.67	84	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.84(骨)
25	A12		Tr 1	1-12	H28.614	86	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
26	A13		Tr 1	1-12	H28.614	86	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
27	A14		Tr 1	1-12	H28.614	86	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
28	A15		Tr 1	1-12	H28.614	86	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
29	A16		Tr 1	1-12	H28.614	86	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
30	A17		Tr 1	12	H28.614	90	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
31	A18		Tr 1	12	H28.614	90	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
32	A19		Tr 1	12	H28.614	90	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
33	A20		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
34	A26		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
35	A27		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
36	A29		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
37	A30		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No. (骨)
20	A7		Tr 1	10	H28.520	14	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	椎体	-	N 取上No.14(骨)
38	A31		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	尾椎	M	神經棘	-	N 取上No. (骨)
39	A28		Tr 1(北東角)	東10(砂輪)	H28.524	22	硬骨魚類	マクロ属	下尾骨	M	(注)骨部 (前筋脚+ 後筋脚)	-	N 取上No. (骨)
40	A33		Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	硬骨魚類	スズキ	第1椎骨	M	椎体	-	Br
41	A37		Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	硬骨魚類	スズキ	腹椎	M	椎体	-	W
42	A40		Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	硬骨魚類	ボウズ科	尾椎	M	椎体	-	W
43	A38		Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	硬骨魚類	目不明	腹椎	M	椎体	-	W
44	A39		Tr 1	15	H28.66	(貝類他)	硬骨魚類	目不明	尾椎	M	椎体	-	W
45	A1						哺乳類	ウマ					
46	A2						哺乳類	ウマ					

第2節 青谷上寺地遺跡出土馬の放射性炭素年代測定と食性復元

金沢大学 人間社会学域
国際文化資源学研究センター
覚張 隆史

【分析概要】

平成28年度の青谷上寺地遺跡発掘で得られた馬骨が、弥生時代の馬であるかどうかを検証することは日本の馬文化に関する研究において極めて重要である。日本列島の遺跡出土馬の化学分析に基づくと、多くの馬が古墳時代以降の年代値を示すことが多い。一方、弥生時代においては同時代の韓半島に既に馬飼育文化は到来しており、日本列島に幾らかの馬が人によって持ち込まれたとしても不思議ではない。先行研究において、出土状況に基づいて縄文時代馬とかつて評価された馬骨も、年代測定による再評価によってすべての個体が古墳時代以降の年代を示している。しかしながら、弥生時代の馬の到来に関する基礎的データの蓄積や年代学的な再調査は未だに僅かなのが現状である。そこで、本分析は青谷上寺地遺跡から出土した馬の骨化学分析の機会を得たため、放射性年代測定及び安定同位体分析を実施し、年代学的評価と共に生存時における馬の給餌内容について考察することを試みた。

【分析試料】

青谷上寺地遺跡の平成28年発掘区であるTr. 1 の第11層から出土した馬(A 2)の切歯(I?) 1点。

【分析方法】

(コラーゲン抽出)

1. 馬骨は歯科用ドリルを用いて、約0.5gの歯根部片を採取した。
2. 採取した骨の表面はディスクカッターを用いて除去した。
3. 超純水中で超音波洗浄し、表面の微細な汚染を除去した。
4. 0.2N NaOHに浸し、4℃・12時間反応させ、骨表面に付着する有機物汚染の影響を除去した。
5. 0.2N NaOHを除去し、超純水で洗浄した後に、超純水の酸度が中性になったことを確認した。
6. 洗浄した試料を、1.2N HCl内にて4℃・12時間反応させ無機物を溶解させた。
7. 無機質を溶解させた後に、超純水で中性に戻した。
8. 0.2N NaOHに浸し、20℃・12時間反応させ、コラーゲンにクロスリンクした土壌由来の有機物汚染の影響を低減させた。
9. 0.2N NaOHを除去し、超純水で洗浄する。試料を浸した超純水の酸度が中性になったことを確認した。
10. 沈殿物にpH3.0のHCl水溶液を加え、ブロックバスにて90℃で16時間の反応を行い、コラーゲンをゼラチン化させた。ゼラチン化した試料入りのガラス管を遠心分離し、上澄みに溶解しているゼラチン化したコラーゲンをガラスフィルターで滤過した。
11. 滤過された試料溶液は2日間凍結乾燥させた。
12. 抽出されたコラーゲンは東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に設置されている安定同位体比質量分析計(EA-IRMS, Flash2000 + Delta V plus, Thermo Fisher Scientific)で、 $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ および炭素・窒素比(C/N)を測定した。次に、放射性炭素年代値の測定は、(株)パレオ・ラボに抽出したコラーゲンを送付し、グラファイト生成及びAMS測定を実施した。

(分析結果)

青谷上寺地遺跡出土馬骨からコラーゲン抽出した結果、4.7%のコラーゲン抽出率を示した。また、元素分析の結果から、炭素含有率・窒素含有率・炭素/窒素比はそれぞれ38.9%、14.4%、3.1を示した。哺乳類の骨コラーゲンが示す炭素含有率・窒素含有率・炭素/窒素比はそれぞれ14%以上、5%以上、C/N=2.9~3.6の範囲を示すことがわかっており(DeNiro 1985, van Klinken 1999)、本分析で測定したコラーゲン精製物はその範囲に収まった。このため、本分析の精製で得られた抽出物の構成は、土壤由来の汚染有機物の影響が低く、生存時における馬のコラーゲン分子が多くを占めていると言える。次に、このコラーゲン精製物を用いて放射性炭素年代測定を実施した結果、放射性炭素年代値は 1468 ± 17 BPを示した。暦年代に較正するために、IntCal13(Reimerら2013)の較正曲線から暦年較正を行った。暦年較正是コンピュータのアプリケーションソフトであるOxCal ver 4.3.1(Ramsey 2009, 2017年アップデータ版)を用いて、暦年代を算出した(表1および図1)。その結果、 $575\text{--}615$ calAD(1σ)を示したことから、遺跡出土馬の生存年代は6世紀後葉から7世紀前葉と推定された。この馬は、古墳終末期から飛鳥時代の間で飼育されていたと考えられるため、全国的な中央集権国家が誕生する前段階の馬飼育の様相を調べる上で貴重な試料として位置付けられる。さらに、飼育形態の一端である給餌内容を復元するために、コラーゲンの炭素・窒素同位体比を測定した結果、岩手県御所野遺跡出土馬(古墳~古代)の同位体比と近似した値を示した(図2)。特に、窒素同位体比が高く、炭素同位体比がやや高いという特徴は、水稲の稲わらと雜穀類のアワなどをそれぞれ摂取していた可能性を示唆する。青谷上寺地遺跡出土馬は、隣県の古墳~古代の馬の食性とは異なる特徴を有しており、当時の中国地方や畿内において多様な給餌形態があったことの証拠となりうる新たな資料として位置付けられる。

(参考文献)

- Ramsey, B. C.(2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(4), 337–360.
- DeNiro, M.J. (1985). Postmortem preservation and alteration of in vivo bone-collagen isotope ratios in relation to paleodietary reconstruction. Nature 317, 806–809.
- Reimer, P.J., E. Bard, A. Bayliss, J.W. Beck, P.G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, C.E. Buck, H. Cheng, R.L. Edwards, M. Friedrich, P.M. Groote, T.P. Guilderson, H. Haflidason, I. Hajdas, C. Hatte, T.J. Heaton, D.L. Hoffmann, A.G. Hogg, K.A. Hughen, K.F. Kaiser, B. Kromer, S.W. Manning, M. Niu, R.W. Reimer, D.A. Richards, E.M. Scott, J.R. Southon, R.A. Staff, C.S.M. Turney, and J. van der Plicht (2013). IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.
- van Klinken, G.J.(1999). Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. Journal of Archaeological Science 26, 687–695.

表1 青谷上寺地遺跡出土骨の ^{14}C 年代測定結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-35327 試料No.8-5	-16.92 \pm 0.15	1468 \pm 17	1470 \pm 15	575–615 cal AD(68.2%)	561–640 cal AD(95.4%)

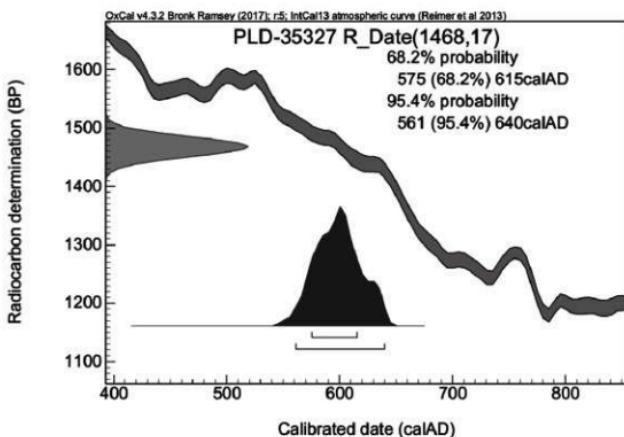


図1 青谷上寺地遺跡出土骨の較正年代

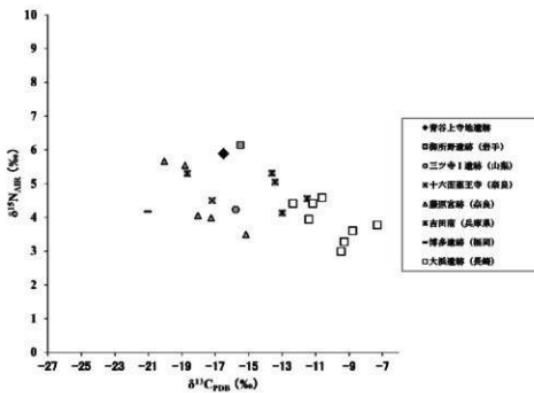


図2 青谷上寺地遺跡出土骨の炭素・窒素安定同位体比

写 真 図 版

図版1



大柄遺跡 調査地遠景(北東から)



大柄遺跡 Tr 2 遺物出土状況(東から)



大柄遺跡 SD-1 断面(南から)



大柄遺跡 Tr 1 完掘状況(東から)



大柄遺跡 Tr 2 完掘状況(西から)



大柄遺跡 Tr 2 土層断面(東から)



池田家墓所 遠景(南西から)



池田家墓所 二・三代藩主墓碑近景(南から)

図版2



池田家墓所 第1トレンチ完掘状況(南から)



池田家墓所 第1トレンチ土層断面(東から)



池田家墓所 第1トレンチ土層断面(南から)



池田家墓所 第1トレンチ瓦砾検出状況(南から)



池田家墓所 第1トレンチ土層断面(南から)



池田家墓所 第2トレンチ完掘状況(南から)

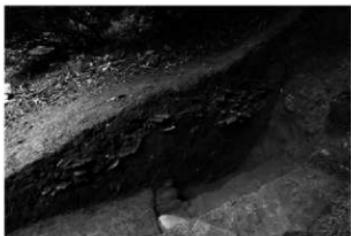


池田家墓所 第2トレンチ土層断面(東から)



池田家墓所 第2トレンチ土層断面(南から)

図版3



池田家墓所 第2トレンチ瓦溜検出状況(東から)



池田家墓所 第2トレンチ排水溝縁石検出状況(南から)



池田家墓所 第2トレンチ排水溝縁石検出状況(北から)



池田家墓所 第3トレンチ完掘状況(南から)



池田家墓所 第3トレンチ土層断面と地覆石(東から)



池田家墓所 第3トレンチ土層断面と地覆石(南から)



池田家墓所 第3トレンチ土層断面と地覆石(西から)



池田家墓所 第3トレンチ地覆石検出状況(西から)

図版4



池田家墓所 第3トレンチ併用時の研磨面が残る地覆石(東から)



池田家墓所 第3トレンチ併用された地覆石(南から)



池田家墓所 第4トレンチ完掘状況(西から)



池田家墓所 第4トレンチ土層断面(南から)



池田家墓所 第4トレンチ土層断面(西から)



池田家墓所 第4トレンチ地覆石検出状況(西から)



池田家墓所 第4トレンチ地覆石検出状況(東から)



池田家墓所 第4トレンチ瓦灌検出状況(南から)

図版5



池田家墓所 第4トレンチ排水溝検出状況(南西から)



池田家墓所 第5トレンチ完掘状況(北西から)



池田家墓所 第5トレンチ土層断面(北西から)



池田家墓所 第5トレンチ土層断面(北東から)



池田家墓所 第5トレンチ土層断面(北東から)



池田家墓所 第5トレンチ排水溝検出状況(北西から)



池田家墓所 第5トレンチ排水溝検出状況(北西から)



池田家墓所 第5トレンチ凹字状の排水溝(北東から)

図版6



池田家墓所 第5トレンチ凹字状の排水溝(北東から)



池田家墓所 第6トレンチ完掘状況(南東から)



池田家墓所 第6トレンチ土層断面(北東から)



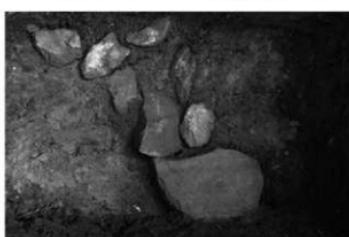
池田家墓所 第6トレンチ(北西から)



池田家墓所 第6トレンチ土層断面(北西から)



池田家墓所 第6トレンチ控え石積検出状況(南東から)

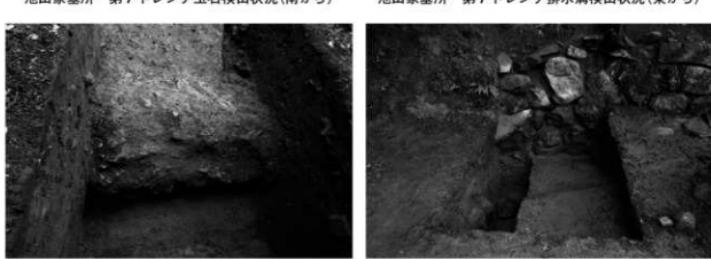
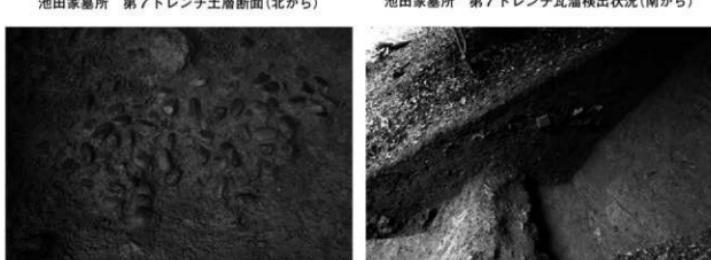
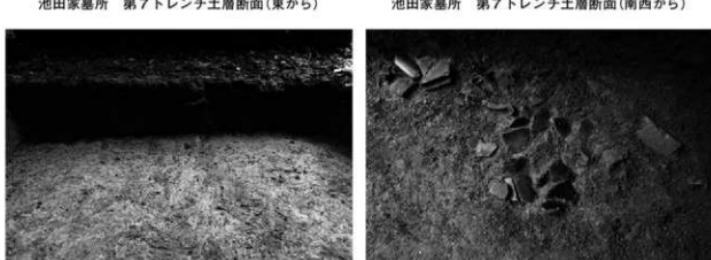
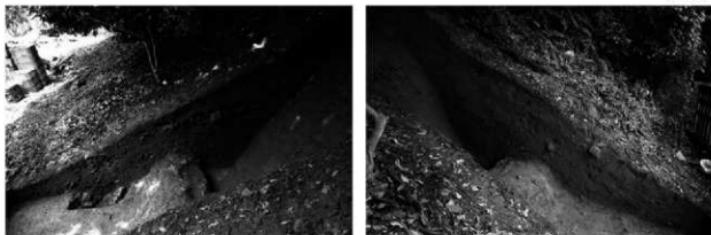


池田家墓所 第6トレンチ控え石積検出状況(北西から)



池田家墓所 第7トレンチ完掘状況(南から)

図版7



図版8



池田家墓所 第8トレンチ土層断面(南から)



池田家墓所 第8トレンチ土層断面(西から)



池田家墓所 第9トレンチ完掘状況(西から)



池田家墓所 第9トレンチ土層断面(南から)



池田家墓所 第9トレンチ土層断面排水溝上面(南から)



池田家墓所 第9トレンチ排水溝土層断面(南から)



池田家墓所 第9トレンチ土層断面(西から)



池田家墓所 第9トレンチ排水溝東護岸(東から)

図版9



池田家墓所 第9トレンチ排水溝東護岸断面(西から)



池田家墓所 第9トレンチ大面取柱柱根と掘方断面検出状況(東から)



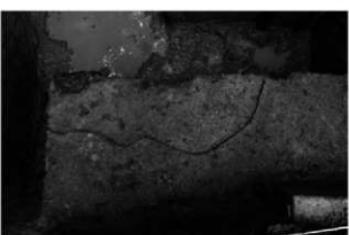
池田家墓所 第9トレンチ大面取柱柱根拡大(東から)



池田家墓所 第9トレンチ大面取柱柱根拡大(北から)



池田家墓所 第9トレンチ柱根抜き取り痕断面(東から)



池田家墓所 第9トレンチ柱根掘方断面(西から)



池田家墓所 地覆石に刻まれた文字(南から)



池田家墓所 地覆石に刻まれた文字(拡大)

図版10



倭文所在遺跡 遠景(北から)



倭文所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)



倭文所在遺跡 第1トレンチ土層断面(南から)



倭文所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)



倭文所在遺跡 第2トレンチ土層断面(南から)



青谷上寺地遺跡 調査地遠景(南から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ土層断面(南から)

図版11



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ土層断面(西から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ土層断面(北から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ土層断面(東から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ木製品検出状況(西から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチアカトリ検出状況(東から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ木製品検出状況(東から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ土器底まり検出状況(南から)

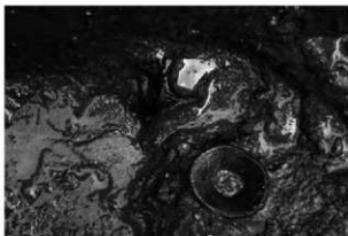


青谷上寺地遺跡 第1トレンチ木製杯検出状況(南から)

図版12



青谷上寺地遺跡 第1トレンチマグロ椎骨検出状況(南から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ椎骨拡大(南から)



青谷上寺地遺跡 第1トレンチ石列検出状況(南から)



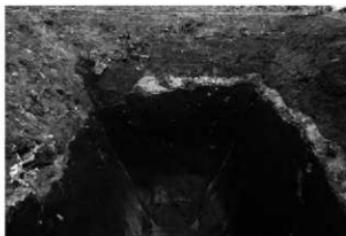
湖山所在遺跡 遠景(北から)



湖山所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南から)



湖山所在遺跡 第1トレンチ土層断面(東から)



湖山所在遺跡 第1トレンチ土層断面(南から)



湖山所在遺跡 第2トレンチ完掘状況(西から)

図版13



湖山所在遺跡 第2トレンチ土層断面(北から)



湖山所在遺跡 第2トレンチ土層断面(西から)



湖山所在遺跡 第3トレンチ完掘状況(西から)



湖山所在遺跡 第3トレンチ土層断面(南から)



湖山所在遺跡 第3トレンチ土層断面(西から)



短尾遺跡 遠景(東から)



短尾遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)

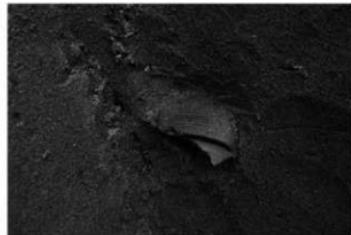


短尾遺跡 第1トレンチ土層断面(南から)

図版14



短尾遺跡 第1トレンチ土層断面(西から)



短尾遺跡 第1トレンチ弥生土器検出状況(北西から)



短尾遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)



短尾遺跡 第2トレンチ土層断面(南から)



短尾遺跡 第2トレンチ土層断面(東から)



松原所在遺跡 調査地遠景(北北東から)



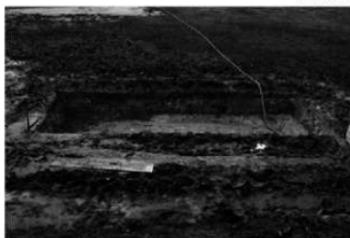
松原所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南西から)



松原所在遺跡 第1トレンチ完掘状況(南東から)



青島第1遺跡 調査地遠景(南南東より)



青島第1遺跡 第1トレンチ完掘状況(西から)



1

大柄遺跡 出土遺物



1

池田家墓所 出土遺物



2

池田家墓所 出土遺物



3



4

池田家墓所 出土遺物



5

图版16



6



7

池田家墓所 出土遗物



8



9

池田家墓所 出土遗物



10



11

池田家墓所 出土遗物



12



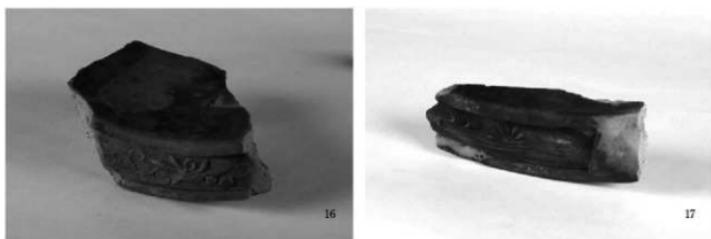
13

池田家墓所 出土遗物

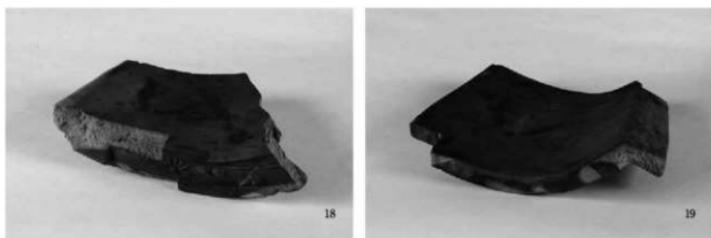
図版17



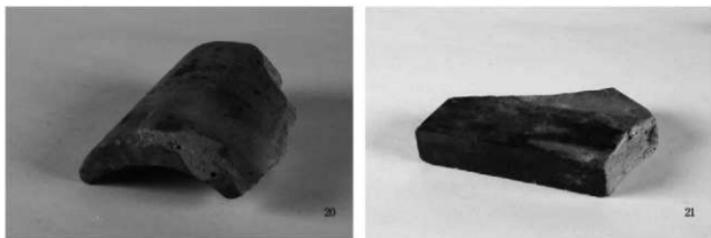
池田家墓所 出土遺物



池田家墓所 出土遺物

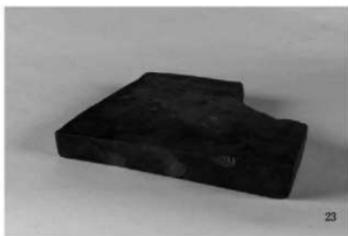
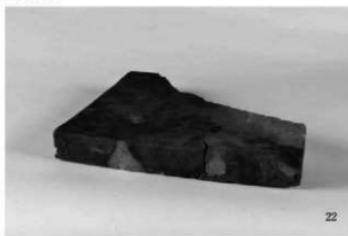


池田家墓所 出土遺物



池田家墓所 出土遺物

図版18



池田家墓所 出土遺物



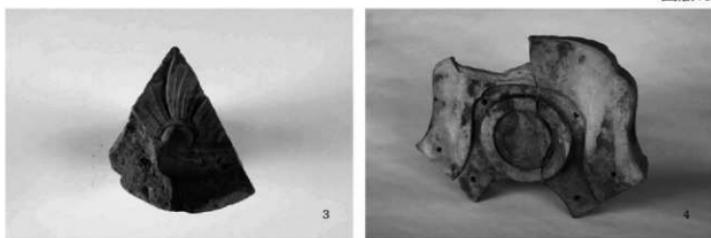
池田家墓所 出土遺物



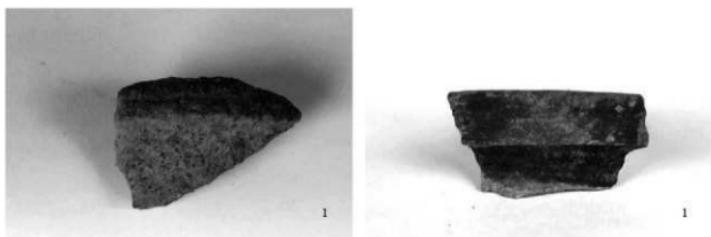
池田家墓所 出土遺物



池田家墓所管理事務所 保管瓦

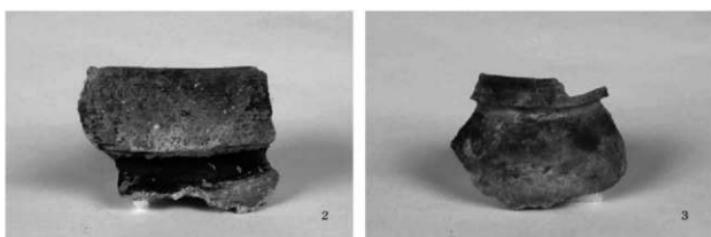


池田家墓所管理事務所 保管瓦

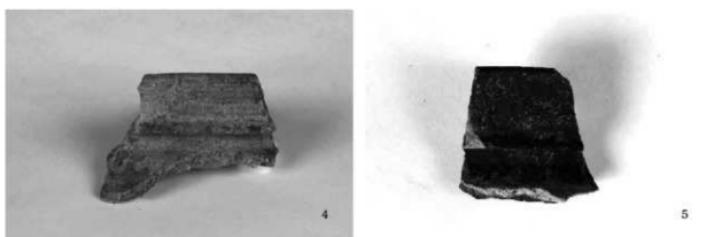


倭文所在遺跡 出土遺物

青谷上寺地遺跡 出土遺物



青谷上寺地遺跡 出土遺物



青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版20

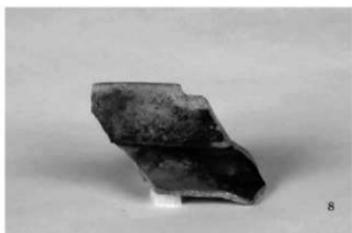


6



7

青谷上寺地遺跡 出土遺物



8



9

青谷上寺地遺跡 出土遺物



10



11

青谷上寺地遺跡 出土遺物



12



13

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版21



14



15

青谷上寺地遺跡 出土遺物



15

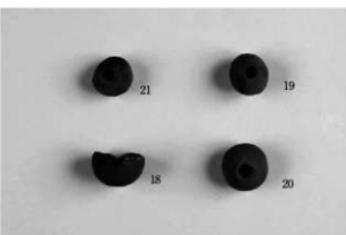


16

青谷上寺地遺跡 出土遺物



17



21

19

18

20

青谷上寺地遺跡 出土遺物



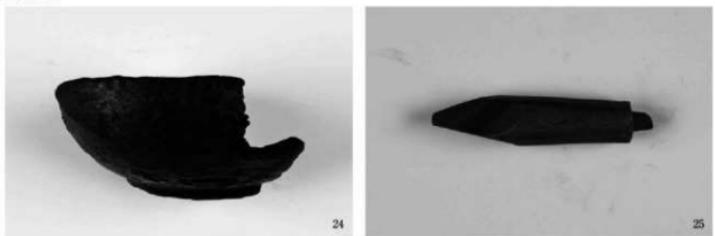
22



23

青谷上寺地遺跡 出土遺物

图版22



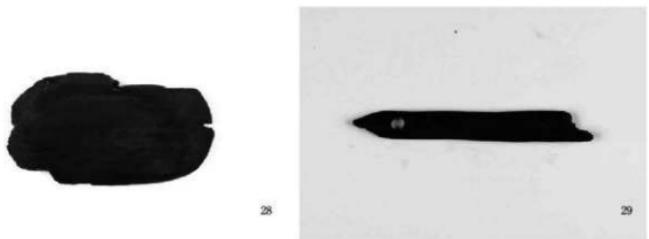
青谷上寺地遺跡 出土遺物



26

27

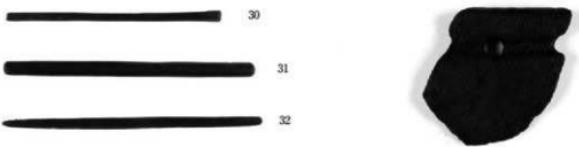
青谷上寺地遺跡 出土遺物



28

29

青谷上寺地遺跡 出土遺物



30

31

32



33

青谷上寺地遺跡 出土遺物



36

青谷上寺地遺跡 出土遺物



37

青谷上寺地遺跡 出土遺物

図版24



38

青谷上寺地遺跡 出土遺物



34

35

青谷上寺地遺跡 出土遺物



39

40

青谷上寺地遺跡 出土遺物



41



42

青谷上寺地遺跡 出土遺物



43



44

青谷上寺地遺跡 出土遺物



45



46

青谷上寺地遺跡 出土遺物



47



48

青谷上寺地遺跡 出土遺物

图版26



49

青谷上寺地遺跡 出土遺物



50



51



52

青谷上寺地遺跡 出土遺物

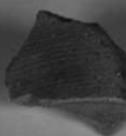


A 1



A 2

青谷上寺地遺跡 出土遺物



1



2

3

4

短尾遺跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせい29ねんど とっとりしないいせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	平成29(2017)年度 鳥取市内道路発掘調査概要報告書							
図書名								
巻次								
シリーズ名	鳥取市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	加川崇 坂田邦彦 山田真宏 野崎欽五 谷岡陽一 神谷伊鶴 横山聖							
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地							
発行年月日	2018年(平成30)3月29日							
所収道路名	所 ^在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査積(m)	調査原因	
大柄道路	鳥取市大柄	31201	35°29'51"	134°11'27"	20150218~20150226	50.0	建物建設	
史跡鳥取藩主池田家墓所	鳥取市国府町奥谷	31201	35°29'06"	134°16'09"	20160811~20161119 20160627~20160804	60.2	史跡整備	
倭文所在道路	鳥取市倭文	31201	35°26'21"	134°11'51"	20160418~20160427	21.0	鉄塔建設	
青谷上寺地道路	鳥取市青谷町青谷	31201	35°30'53"	133°59'42"	20160511~20160617	135.0	工場改築事業	
調山所在道路	鳥取市調山町	31201	35°30'57"	134°10'35"	20160804~20160914	63.0	範囲確認	
短尾道路	鳥取市気高町浜村	31201	35°31'02"	134°02'34"	20160915~20161004	22.5	土砂採取	
松原所在道路	鳥取市松原町	31201	35°29'30"	134°08'02"	20161020~20161031	21.0	建物建設	
青島第1道路	鳥取市高住青島	31201	35°30'10"	134°09'19"	20170306~20170327	21.0	ビオトープ設置	
所収道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大柄道路	集落跡	縄文~中世	溝状構造	縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	試掘調査として実施			
史跡鳥取藩主池田家墓所	近世墓	近世	玉垣・地覆石・排水溝・門字状溝・大面取柱の柱根	弥生土器、瓦・陶磁器、木製品、鉄釘	試掘調査として実施			
倭文所在道路	散布地	弥生	なし	弥生土器	試掘調査として実施			
青谷上寺地道路	集落跡	弥生~近世	なし	弥生土器・土師器・石器・木製品・土製品・樹皮・魚骨・陶磁器	試掘調査として実施			
調山所在道路	散布地		なし	なし	試掘調査として実施			
短尾道路	墳墓	弥生~古墳	なし	弥生土器・須恵器	試掘調査として実施			
松原所在道路	散布地	縄文~中世	なし	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	試掘調査として実施			
青島第1道路	散布地	近現代	なし	瓦片・磁器片	試掘調査として実施			

平成29(2017)年度
鳥取市内道路発掘調査概要報告書

発 行 2018年(平成30) 3月29日

編 集 烏取市教育委員会文化財課
鳥取県鳥取市上魚町39番地
〒680-8571 電話(0857)20-3367

印 刷 有限会社螢光社 印刷
鳥取県鳥取市青葉町2丁目212番地
〒680-0802 電話(0857)22-5565
